

8-478

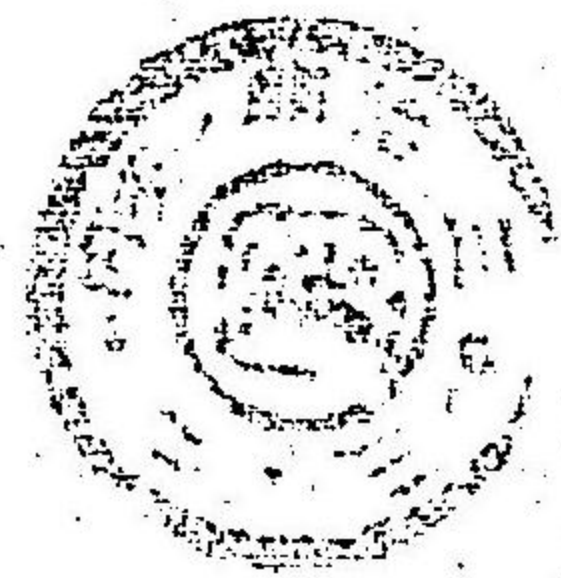
# 照閣之燈

19-561

佛國リギヨル口述  
日本前田長太筆記

19-561

全



余嘗て古代の妖怪史談を讀み、奇怪の一話を得、事頗る故し、然れども今日に至るまで種々の服裝を被りて、日々社會に行はるゝは奇と謂ふべし、史に曰く、紅塵萬丈の都門を距ること千餘里、一邑あり、地幽にして勢阻、山岳嵒然として之を環る、偶々居民の間に奇怪の言出づ、一犬虚を吠えて、萬犬實を傳ふ、曰く山邑の間に狹道あり、崎嶇羊腸、草樹藂茂して、奇巖怪石其間に横はる、一夜邑民歩して狹道を行く、一幻影あり、朦朧として其前に現はる、月色黯愴、其何物たるやを知る能はず、出沒隱見、倏にして其容を變じ、倏にして其所を移す、然れども一毫の響を發せず、熟視之を久ふせんとするや、忽然として寸前に出づ、邑民驚く太甚し、毛髮悚然、冷汗其背を浸

二  
す、走て家に歸り、前後忘却、氣息奄々、茫然自失すること稍久し、  
居る數時、意漸く安じて氣故に復す、口を開て備さに其實狀を語る  
や否や、怪報口より耳に傳はりて、翌朝に至り舉邑喧々たり、怪報は  
恐怖を蒔き、恐怖は臆測を生み、虚々實々、揣摩の説百出紛起す、  
曰く是れ魍魎魍魎の類ならん、曰く是れ山林異氣の生ずる怪物な  
らん、曰く是れ惡鬼天魔の所爲ならん、否々是れ恐くは山賊の偶々  
目に觸れたるならん、否然らず必ずや此邑に禍する者の現はれたるならん  
云々と、是に於て平家々夕陽の西に傾くを待たずして早く既に門を  
閉ぢ、寂寥として人皆聲息を絶つ、村童の叫ぶや、語るに此事を以  
もすれば、忽ち靜まる、乳兒の泣くや、制するに此怪物を以てすれば、忽

ち黙す、夜行是れより稀に、狹道遂に人跡を絶つ、此の如きこと幾ん  
と一年餘、而して居民の恐怖は減少せまして日に月に愈々益々激  
甚を加ふるに至る、幻影の談は到る處に語られ、奇怪の想像は衆民の  
腦裏に描かる、寂寞たる村落一層寂寞となり、夜に入つて家門を出  
づる者は屈強の男子のみ、婦女子の如きは惴々として深室に危語す、  
然るに奇怪なる哉、此一年有餘の間、敢て一人事の眞偽を探らんと  
欲する者なかりき、之を探らんと欲する思慮なきが爲か、將た勇氣の缺  
乏せるが爲か、人得て知るなし、唯だ其探らざりし一事のみは事實なり、  
然りと雖一個の村落豈人なからんや、一農夫あり、剛勇を以て名あ  
り、斷然決意、直前勇往以て事の實況を探らんと欲す、衆人の恐

怖を排し語つて曰く、事の眞偽如何を究めずして徒らに恐怖するが如きは卑怯の至なり、我請ふ是より狹道に入り、其所謂幻影なる者の實否を探らんと、因て直に右手に棍棒を携へ、左手に燈火を持して飄然決行す、行くく狹道に入り一の幽谷に近かんとするや、果して一の幻影岩石の間に婆娑たるを見る、強と雖一見して趨趨逡巡す、佇立して省慮すること數刻、遂に獨語して曰く、怪は怪なりと雖、是れ唯だ一幻影たるに過ぎず、恐れんよりは寧ろ探れよ、堅く棍棒を握り、高く燈火を掲げて、歩々相進む、進むに従つて影滅す、蓋し燈火の光り四邊の暗さを照して、怪物の影をして益々消失せしめられたるなり、農夫勇を得、濶歩して岩下に到る、到れを則ち何を圖らん一年有

餘の怪物唯是れ黒色の一猫に過ぎざりしを、而して其影の婆娑たりしは、猫が山鼠を捕捉せんが爲に、岩石の間を上下せることなりと、農夫笑つて曰く、嗚呼眞に百聞は一見に若かず、趨つて邑に歸り、語るに實狀を以てす、民亦皆笑つて曰く、嗚呼果して猫なりしか、怪物にはあらざりけるか、是に於て乎恐怖は忽ち代つて安心となり、民皆其堵に安するに至れりと云ふ、一燈の光り能く事の真相を照して、虚傳を排し、幻想を滅し、疑心暗鬼の邑民をして自ら其怯愚を笑ふに至らしめたるもの、豈其補益する所鮮少なりとせん哉。

熟ら世間の状態を視るに、世は虚傳と先入とを以て充塞しつゝあり、或人は其言ふ所を知らずして漫に臆測揣摩の説を加へ、或人は知つ

て而して其實を傳へず、故より眞理を曲説埋没せんとす、而して世人の多くは是等の人の語りたる所を講究せずして、單だ之を反覆するを事とし、漸次枝葉を附し、彩色を施して、之を後昆に傳説す、是を以て滔々たる天下遂に之を眞と爲し、實と信じて、物換り星移るに従つて、愈々益々確固不拔の眞理、彰明顯著の事實の如くに見做し、終には敢て一人茲に疑を狭ひ者なきに至る、所謂先入主となつて、他を排するを知ると雖、自を究むるを知らざるに至るなり、然りと雖偶々利害の觀念なき者、先入の思想なき者來つて之を檢覈するときは、往々實なき虚傳の被服したるもの、架空の説の裝飾せられたるものに過ぎざるを看破す、余は此國民彼國民と區別を置いて論ずるものにあらず、各

國各族各民皆此の如く先入の思想に左右せられ、利害の觀念に驅逐せられて、無稽の談架空の説を眞理の如く事實の如く保存墨守すと概言するのみ。

今や余此小冊子を刊して之を世に公にせんとす、其目的全く世に充塞せる虚傳と先入とを打破せんとするに在り、然れども硬強の手段を執て、大打撃を茲に試みるは、策の得たるものにあらずと思料す、因て眞理と事實の燈光を掲げて、除るに前記せる虚傳先入の暗界を照さんと欲しぬ、題して「照闇の燈」となすは、蓋し是が爲なり、余は固より此一小冊子を以て世間萬般の虚傳先入を照破したりとは思考せず、一人の生涯は自己の腦裡に蟠屈せる先入思想を排除するにも

足らず、況んや世間一般に充塞しつゝあるものをや、然りと雖余をして有體に斷言せしめよ、余は不敏と雖真理の燈火を掲げて、衆愚の見て以て確固不拔、彰明顯著となせる歴史的哲理的及政治的問題を照さんと欲せり、是等の大問題は時俗の眼前に、否或る一部の學者の眼前にも一見恐怖すべき怪物の如く思はれて、永く彼等を趨逡巡せしめて、真理の道に直前勇往するを得せしめざるものなり、余は剛膽にも強勇を以て誇れる農夫の爲に倣ひて、此怪物の真相を探らんと企てり、故に讀者若し同書中に掲ぐる問題の宗教的臭味を帯ぶるを見て、直に之を放棄せず、姑く之を徹始徹終するの勇氣忍耐あらと、必ずや幻影の眞光に輝かされて消失し、虚傳の事實に

照されて落盡するを見て、大に得る所あらんとす、其時讀者亦自ら必ず言はんとす、然り、我實に今日に至るまで斯くは思はざりき、一怪物なりと想像せるもの、是れ唯だ一黒猫に過ぎざりしかと。

明治三十年二月師父リギヨル氏の意を承けて

前田長太謹識

目次

(一)	歐洲古代に於ける宗教史一斑……………	一頁
(二)	歐洲古代に於ける政教の關係……………	十四頁
(三)	佛國の宗教亂 「セン、バルテリミー」の虐殺 「ナント」敕令の解廢……………	二十頁
(四)	信仰と神學と科學との關係區別……………	五十四頁
(五)	大學校に神學科を設置する可否……………	五十七頁
(六)	神學の既定する人性的神は科學の精神に反らざる論證……………	六十三頁
(七)	加特力教徒たると哲學者科學者たるとの關係……………	百六頁
(八)	歐洲諸國に於ても加特力教を嘲笑攻撃する者ある理由 <small>(歐洲諸國の内幕)</small> ……………	百十二頁
(九)	加特力教以外にも正人君子の輩出するを得る理由……………	百十九頁

# 照闇の燈

佛國　リギョール口述  
日本　前田長太筆記

## 歐洲古代に於ける宗教史一斑

基督本教以前に在りては、東西各國人民の信奉せる宗教概して大同小異なりき、今各國の宗教史なるものを繙閱するに、東西何れの邦國に於ても往々上に無上至尊の神を置き、下には男女無數の神を立て、前者は萬能の力を以て森羅萬象を主宰し、後者は四に割據して各々其國土を防守せるが如くに傳説しぬ、是に於て乎天の神あり、地の神あり、山の神あり、川の神あり、田園の神、都城の神、甚しきは地獄の神ありと云ふに至る、其他善の神もあれを惡の神もあり、學の神もあれを藝の神もあり、富の神、貧の神、樂の神、禍の神等豈啻八百萬神のみならんや、其數實に天上の星海濱の砂も





管ならざるに至る、凡そ天地間に覆載せらるる萬物と人間界に現没する百事、皆之を神の保護支配に歸し、善惡貧富、禍福吉凶亦皆然せざるなし、文物隆盛の今日より之を觀る時は、洵に奇怪千萬、笑止至極の如くに思はるれども、憫むべし基督公教の光未だ世界の全面に發射せざる時に在りては、東西何れの邦國の宗教も皆斯の如くならざるはあし、勿論國の東西、時の古今によりて神の名稱を異にし、神業の記述等を殊にしたりには相違なれども、天地人間の間に有ると有らゆる事物を解釋せんが爲に、男女無數の神を想出したるに至つては、古今東西全く其軌を一にす。

然りと雖今仔細に此等の事の由つて來る所を遡究するときは、亦以て人間太初の信仰を窺知するに足るものあり、即ち世界太初の人民は森羅萬象の大元、獨一無二の眞神の存在を慥に識認したる事、及此神の不可思議なる攝理は普く四海六合に彌滿して、極天極地到達せざる所なきを確信したる事は、以上の誤謬の中にも明に讀まるとなり、惟ふに當初の人民は此廣大無邊なる攝理を種々なる神に歸せんとしたるものなるを、後代の民は尙一層之を明白に表示せんが爲に、眼前に目撃せらるる凡百の有形物に化

身せしめて、知らず識らず千態萬狀、奇種異様なる神を想像し出でたるか、然るに其想像の走る處、愈々出で、愈々奇、終には彼の全能なる、全知なる、全善なる、又其攝理の八紘に彌滿せる獨一無二の眞神をして、奇怪千萬、笑止至極なる譬喩幻影の裡に埋没するに至りたるものなり。

今此に東西各國の宗教史を逐一引例するは煩勞に堪へず、古來其名東西に顯然たりし希臘羅馬の宗教史は、一以て萬を知らしむるに足る、故に余は此二國の宗教史所謂神傳記なるものに就き、同國人民の信奉せる諸神の名稱、本源、特性、及其職位等を概記して以て余の前言の虚ならざるを證せんと欲す。

同國の神傳記に據るに、儼然萬物の上に位して、其威權八百萬神を震攝せしむ、偉大の神なり、之れをゾヒテルと云ふ、大古には之を稱してダイスピテルと云へり、日の父と云ふ義なり、太神の父はサチヌルヌ、一名クロノスと稱す、クロノスとは希臘語にして、時と云ふ意なり、母はレア、皇天皇土の女と云ふ意義なる由、サチヌルヌレアを迎へて、夥多の子を擧ぐ、然れども異日其子の中に己の神位を褫はん者あるを恐れ、

生出の當時に皆之を吞噬す、*フニピタル*の生るゝや、其母*レア*竊に之を救はんと欲し、石を楯楯に纏ふて、之を夫神の前に投ず、夫神直に取て之を呑む、因て免るゝを得たりと云ふ。

*フニピタル*に二弟あり、曰く*ネプチューン*、曰く*プルトン*、二弟共に*フニピタル*と同一の道を以て父の吞噬を免れたり、外に又二人の妹あり、*ウキスタ*、*セレス*と稱す。

*フニピタル*既に父の害を免れ、*クレタ*島に於て生育せらる、牝牛「*アマルター*」と名くる者、乳を與へて之を養へりと云ふ、生長して漸く成童に達する比ひ、果して其父の位を刺奪し、二弟と共に世界を三分す、*ネプチューン*は海洋、*プルトン*は地獄、*フニピタル*は長子たるの故を以て天を取りたり。

妹の*ウキスタ*と云へるは火の神にして、希羅兩國の人民は之を氏神として祭れり、此女神の堂には、幾多の貞女相集り、日夜護摩を焚くを以て其務とす、羅馬人は其家の入口に同女神の護摩壇を設け、聖火を焚て之を祭るの例ありしが故に、家の入口若くは玄関を指して「*ウキスタプロム*」と稱せり、*ウキスタ*の壇と云ふ意味なり。

次妹*セレス*は田野五穀の神にして、初めて民に農業を教へたるは此女神なりと云ふ、其祭祀極めて秘密なりしが故に、今尙之を知るに由なし、此神の影像を見るに、頭に茨を冠し、手に鎌を持して、常に車に乗じ龍蛇之を引く。

*フニピタル*父の位を禡ふて以て之に代りたれども、常に枕を高ふして其位に安ずること能はざりき、一日下界の巨人等野心を起し、相共に黨引して天に楷し、直前勇往、取て以て之に代らんことを企圖す、是に於て峨々たる高山峻岳を抜き、層々相積んで將に天に達せんとするや、事忽ち發覺せらる、*フニピタル*嚇として怒り、激雷一聲、山岳を傾倒し、巨人を電撃し、悉く之を土中に埋没す、然れども尙人間の逆心を罰せんが爲に、洪水をして地に氾濫せしめ、漫々たる横流の中に世界の兆民を覆没せしに、但だ*テッサリー*の王*デッカリオン*及其后*ピルラ*を赦したり、相傳ふ、世界人類の再び繁殖し來れるは、全く此王后の爲なりと、其説に曰く、王后天下に巡遊し石を背後に投じけるに、奇怪や其石皆化して忽ち人間となりたりと。

*フニピタル*は其妹*フニオン*なるものを娶りて己の妻となし、*ヘッ*、*ウルケン*、*マルス*の

三子を擧ぐ。

ヘーは青春妙齡の女神、常に諸神の宴席に待し、仙酒の玉杯を携へ、盃盤の間に徘徊す、一日蓮歩誤つて衆神稠坐の前に倒れ、滿面に紅潮を漲らしけるが、是れより深く耻ぢて、諸神宴遊の綺席に出るを欲せざりしと云ふ、爾來紅顔の美少年ガコモードなる者、之に代つて神宴に待したり、佳神は久しく閨門を閉ぢて空房を守りしが、天の成せる麗質誰か之を棄てん、後日武勇の神ヘルッル昇上して在天の神列に入りたる時、娶て以て蘭堂に合登の禮を擧げたりと云ふ。

ウルケンハは生れながらにして跛、其母之を天より地に投じけれを、終日轉々して夕陽西に傾き晚鴉埒に歸る頃、漸くレムノス島に墜落したりといふ、ウルケンは、土中の火神、シ、ル火山の極底に潜伏し、ジュピタル太神の火樂を製造し、神軍の兵器を作るを以て職とす、シッロブなる者ありて常に之が勞を助く、是又狀貌奇異、額上一目の巨人なりしとぞ。

マルスは戰の神、暴勇狂怒の化身、羅馬の民大に之を尊崇す、稱して曰く、帝國の創立者ロムルス之父なりと、泰西の年歴上年の三月と遇の三日を稱するに此神の名を以てするは、天下公衆の普知する所なり。

ジュピタルは兄弟的夫婦の間に此の如き奇兒を設けたり、尙女神ミナルウなる者をも此數に加ふるを得、但だ其生出頗る奇なり、一日ジュピタル太神頭痛岑々床上に苦悶せる時、ウルケンを床下に招き、頭を穿たん事を命ず、ウルケン命に應じて斧を執り、一聲高く大神の頭蓋を破砕しけるに、不思議なる哉玉顔雪肌の一女、身に甲冑を穿ち、手に箭矢を持ちて婆然舞り出づ、名けて之をミネルウと稱す、希臘の民は之をアテナと云ひ、智勇の神として尊拜す、學術文藝を擁護し、公明正大の裁判に主坐し、戰場に出で彈丸雨飛の衝に立て兵士を奨勵鼓舞する等、皆同女神の爲す所なりと云ふ、相傳ふ、女神一日華清の池に雪肌を洒し、湯泉水滑なる處に凝脂を洗ひける時、チレソアスなる者私に目を女神の玉身に注ぎ、恍惚として熟視之を久ふしけるを以て、女神は其罪を罰せんが爲に、直に其明を失はしめたりとぞ、哲學、兵術、文藝等の淵藪を以て名あるアテナ府に於ては、女神の祭典最も盛大を極む。

詩人の説に據れを、*ジュピテル* *ジュノン*の間には、琴瑟調をずして、屢々風波起りたりと云ふ、蓋し*ジュノン*は性來妒悍の女、神室紊亂せる全く茲に職由せりとぞ、然れども一説に據れを、太神亦屢々之を虐待したるに由ると云ふ、茲に琴瑟不調の一椿事あり、一日*ジュノン*諸神と謀りて其夫神を害せんことを企てしに、事忽ち發覺せらる、*ジュピテル*大に怒り直に之を捕縛して、其兩足に鐵砧を懸け、茫々たる天地の兩間に之を鈎下したり、然れども諸神の恫願によりて、終に之を赦したりと云ふ。

*ジュノン*の嫉妒固より不可、然れども亦全く理なしと謂ふ能はざるものあり、何となれを*ジュピテル*は*ジュノン*の外に、女神と女人中より幾多の佳麗を撰抜して、朝々暮々之を寵愛したれをなり、(余は之が詳細を語りて、太神の色情史を綴るを欲せず、讀者の潔眼を汚さんことを恐るれをなり)、但だ茲に其佳麗の中より*テミス*、*イオ*、*エロップ*の三神を列記するも、讀者の視聽に觸れざらん歎。

*テミス*は公義の女神、昔者*テッサリー*に於て、垂簾の政を聽きたりといふ、故に其の影像是右手に劍を案し、左手に權衡を持す。

*イオ*はアルゴス國初代の王姫なり、太神取つて之を愛す、後に*ジュノン*の嫉妒を避けしめんが爲に、化して牝牛となしたりと云ふ。

*エロップ*は*フェニシヤ*國王*アエノール*の女、太神之を奪つて牛身に變じ、西方の一國に携へ行く、因て其國を稱して歐羅巴と云へりとぞ。

其他太神の子女中重なる者の名を擧ぐれを、曰く*ウニクス*、愛情歡樂の神、曰く*バックス*、酒色宴遊の神、曰く*メルクル*、諸神の使節にして、能弁、貿易及盜賊の神、曰く*サヤ*、夜或は獵の神、曰く*アポロン*、日或は詩の神、曰く*ヘルクル*、武勇の神にして日本の八幡の如き者なり。

今此諸神に就き其詳細を記するの遑なし、但だ最後の神*ヘルクル*に就て一の奇談あるが故に、記して以て讀者の一笑に供せん。

*ヘルクル*は希臘豪傑中尤も武勇の名高き者、嘗て國難を救ふが爲に、絶倫の功業を樹てたりと云ふを以て、希臘羅馬の詩家は嘖々として其忠勇義烈の盛徳を吟誦す、此者元と太神とアルクメーヌ(太神の寵姫)の間に生れたる者なれども、太神の配偶*ジュノ*

ン取つて以て自から之を養育す、傳に曰く、一日シユノン之に乳を與へしに、流石は強膽の兒、力に儘せて痛く其乳首を噛む、乳母恐慌之を引離せしに、乳汁驟雨の如く滂然空間に發射して、茲に忽ち銀河を造成したりと云ふ、同國古代の民が銀河を指してシユノンの乳と稱せるは、蓋し是が爲なり。

神傳記を繕くに、以上の諸神各々一定の領土に住すと云ふ、シユピタルは儼然として八百萬神の上に位する者、故に希臘最高の山オリンブに住す、山嶺に玉坐を置き、該所より三千世界を統御す、他の諸神は往々玉坐の遠近に邸宅を構へ、日夕王事に執掌す、偶々出で、他に従事するときは、定時に朝參してシユピタル太神の天機を伺ひたりとぞ、左に其住地の異なる者二三を擧げん。

アポロン、日或は詩の神、九神と共にバルナス山に住すと云ふ、九神とはムーズと稱せらる女神の一隊にして、世に之を學藝の神と謂ふ。

ネプチューン、即是れシユピタルの弟、海洋の神なるを以て、海底に其居を下す、常に三齒の杖を以て、渺茫たる洋界を震蕩す、若夫れ海濤萬里、水天淼漫の際を馳走するや、

一大具狀の車に駕し、幾多の神女人魚を倍乗せしめ、海馬に鞭つて、一碧萬頃の領所を自在に飛奔すと云ふ、因に云ふ、人魚とはネプチューンの使臣、人面魚身の海神なり、因つて名く、神女とは窈窕婉轉たる蛾眉、常に江海、泉林、凡て山紫水明の勝地に住すと云ふ。

プルトン、是又シユピタルの弟、地獄の神なり、故に地獄に在りてエラク、ミノス、ラダマントといふ一見悚動すべき法吏と共に、死者の是非善惡を裁判す、而して一たび其裁斷によりて善惡分明是非相定まるや、一決不動の宣告茲に出で、善人は信賞せられ、悪人は必罰せらる、信賞せらる、善人は相俱に「エリセ」の原に往きて、「テ」(忘却の意)の川に飲み、浮世の苦辛艱險を打忘れて、和氣霽然たる裡に優悠相樂むと云ふ、必罰せらる、悪人は之に反して、「タルタル」と云ふ黯愴たる冥府に陥りて、其罪に應せる苦罰を受く、冥府の内には「フリー」と云ふ鬼あり、惡言の化身にして、其職重もに忘恩の子弟、不敬の徒輩、破誓謀反の惡人等を苦むるにあり、其狀貌は怒眼亂髮、身に黒衣、首に蛇蝎、一見人をして悚然たらしむとぞ、冥府の門外に

は三頭の大犬あり、「セルベール」と云ふ、其咆哮府内に盡き、悪人の膽を寒からしむ、蛇蝎其首に蔓み、毒汁常に其口より滴出すといふ。

希羅兩國神傳記の説く所大概ね此の如し、奇々怪々と謂ふより外なし、之が詳細を語るが如きは、畢竟無用の長談、姑く茲に記事の筆を擱く。

之を要するに、歐洲古代の人民、即ち未だ基督本教の眞光に照らされざりし人民は、徃々其知識暗み、其心術曲りたるが爲に、千態萬狀、奇種異様の神を想像し出で、其數幾百千萬なるかを知らしめざるに至りたり、中に善なる者もあれど惡なる者もあり、愛す可き者もあれど怖る可き者もあり、情慾にも神あり、盜賊にも神あり、人間萬事皆之を神の有に歸して、世界苦樂の地の如きも、亦皆之を善神又は惡神の居に充てざるはなし、其妄想迷信の極まる處、天地間の事々物々、皆これを神として畏敬するにいたる、而して眞個に畏敬すべき唯一の眞神に至りては、却りて之を忘却の墓に埋没したり、是れ蓋し造物主と被造物との觀念を混同錯亂したるに職由したるものにて、其結果一の<sup>ウ</sup>ピタルを以て、天地間の有らゆる事物を解釋するに及びぬ、故に其言

に曰く

「汝仰いで天を觀、俯して地を察せよ、矚目する所の事々物々、孰れか是れ

<sup>ウ</sup>ピタルならざらん云々。」

是に於て乎彼等の頭腦は、万神論の爲に全く腐蝕したはんね。

嗟呼歐洲古代の神傳記を繙き、當時人民の迷妄を見る者、誰か惘然の思なきを得んや、然れども記せよ、是れ此迷妄の人民は、世界中最も開明を以て稱せられたる民なるを、彼等の中には高渾雄麗、天地を歌ひたる詩人あり、飛辨快舌、鬼神を泣かしめたる辨士あり、遠見卓識、宇宙の濫輿を究めたる哲士等ありて、其著作は徃々一代の傑作、其遺書は何れも皆天下後世の文範にして、後代作家の企て、及むず、今日學者の學んで摸しつゝあるものなるを、特に怪む、以上列記せる奇々怪々の説は、同國の最も文物隆盛の時代に於て行はれたることを、然らむ則ち文物の隆盛此民に及むざりし他國の人民が、層一層愚暗迷妄の域に沈淪して、森羅萬象の大元を忘却し、獨一無二の眞神を遺棄して、或は頑冥無覺の事物を祭り、或は自家製作の木偶の前に跪坐拜伏する

が如きは、毫も怪むに足らざるを見るなり、若夫れ自國創業の祖先、功業偉大の帝王、鴻恩山高く水深き父母、忠孝比類稀なる臣子等に向つて、神拜同様の尊拜を呈して、其殿堂位牌の前に合掌遙拜するが如き人民の今尙其跡を絶たざるが如きは、尙以て恠むに足らざるなり。

### 歐洲古代に於ける政教の關係

余は曩に「國家盛衰の原理」と云ふ一書を著し、國家の盛衰は宗教の盛衰に大關係あることを歴史的に詳しく證論せり、故に若し宗教と國家の關係如何を詳知せんと欲せば、同書に就て見らるべし、茲には單に歐洲古代に在りて、政教如何の關係を有したるかを一言せんが爲に、歴史上の事實より數者の例證を引くのみ。

古代の歴史は皆證して曰く、政教の關係は密接にして須臾も相離るべからずと、今退て其理由を考ふるに、必ずや斯くなかるべからざるを見る、何となれを政教の支配すべき者は均しく是れ同一の人間なれをなり、勿論人間には靈魂と肉身の二者あり、一は無形にして一は有形なり、而して宗教は重もに其無形の靈魂を支配し、政治は直接有

形の肉身を支配す、然れども靈魂と肉身とは人間たるに於て須臾も相離るべからざる要素なり、是に於て乎靈魂と肉身を支配する宗教と政治も、須臾も相離るべからざる關係あるべきを知るなり、而して歴史は此點に於て明に理論と一致符合す、蓋し東西到る處國家の存する所は宗教の存する所、宗教の存せざる所は國家の存せざる所なる事は、歴史上争ふべからざるを以てなり、試に

先づ羅馬帝國を看よ、同國の最も神聖なる地、滿都の人民の均しく仰望するところに、ジュピテル太神の堂宇巍然として雲表に聳ゆ、之を「スタートール」の殿堂と謂ふ、「スタートール」とは安定者の意にして、日本に謂ふ鎮守の神と異なることなし、是れ蓋し太神が該所より四方を統御し、萬機を總攬し、國家の安寧秩序を維持すと信認したるが爲なり。

次に歐洲諸國の人民を視よ、未だ羅馬帝國に征服せられざる以前より、早く既に自國創業の初王若くは王室の祖先等を以て、往々太神ジュピテルの後裔なりと言傳へたり、クレタの嶋民が同島の立法者ミノスを以て、マニピテルとエロップとの子なりと稱し

たるが如き、以て見るべき也、其他トロア城主マルクス、エウノヌ國王エアン、リヂヤ國王メオン等亦皆ジュピテル大神の子孫なりと傳説せられたるが如き、是又其適例として見るべきなり。

嗚呼由來何れの邦國に於ても、其祖宗を神にし、其國を神聖にして以て民を治めざるはなし、余は單だ二三の例を挙げたるのみ、他は皆推して知るべし。

歐洲古代の歴史は亦證明して曰く、凡そ事國家經綸の大事に關せるときは、東西孰れも或る神の大權に基いて處理決定せざるはなしと、然り、余は一國法を布き、戰を開く等の大事あるときには、必ず神に諮詢するを以て始めたるを見る。請ふ看よ、リクルグの法律のスパルト國に於ける、ソロン法律のアテナ府に於ける、實施の前孰れも先づデルフの託宣によりて、アポロン(神名)の裁可を経たるにあらざるや、豈嘗希臘のみならん。

羅馬帝國に於ても亦然り、同國古代の立法者ヌマが女神エセリアの天啓を受けたりと稱したるが如き、爾來同國賢明の民が一法を布く毎に、神託鳥占の道を假りて、諸神の天意を窺ひたるが如き、又彼の修好宣戰の度毎にも、必ず此道を以て議定したるが如き、數へ來れを之が例證は枚擧に遑わらざるなり。

ろれ此の如し、治國平天下の事孰れか宗教之に關せざらん、希臘羅馬の例證亦以て見るべきなり、勿論東西國を成す者其數一二に止まらず、去れを中には自國創業の初王を以て神なり、神の子孫なりと傳説せざる者之ありとするも、そが代りに邦家の祖先とも稱すべき者に、神拜同然の尊拜を加へざる國は恐くを十に一もなかるべし、祖先として仰がるゝ者は往々皆赫々たる功業を以て、顯然人表に立ちたる者に相違なし、而して星霜の經過は人の盛徳偉業をして益々光輝あらしむるものなり、蓋し年を積み代を累ぬるに従つて、後昆の眼前に層一層尊儼偉大の觀を呈し來るを以て、一代は一代より尊く、遂に千百年後の子孫より之を仰望するときは、宛も大山峻嶺の巖然として天を摩するが如き思あり、是に於て乎神稱出で、是に於て乎神拜呈せらる、而して歲月の推移に習例の因襲相加はるを以て、終には後人の念頭に神人の觀念混同し來りて、孰れか神、孰れか人なるかを識別するに苦むに至る、時に人智の發開、文物の隆



盛明かに人神を識別せしむるありと雖、因襲の久しき一朝にして脱し難く、智識の上  
に之を識別するも、實行の上に之を識別せず、而して利害の分るゝ處、情欲の傾く處、  
人を神として崇むる因襲をして愈々益々脱し易からざらしむ、是れ實に古今東西の歴  
史的事實として明かに讀まるゝ所なり。

余は終に臨み、國家は宗教と其盛衰を同ふするの事實を例證せんを欲す、然れども「國  
家盛衰の原理」なる書は、正しく此事を評論したるを以て、茲には蛇足を添へず、但だ  
一詩人の言を以て其關係の如何を密切なるかを知らしめむ。

オグスト皇帝の治世は、羅馬帝國の權勢の最も強大なりし時なることは、人の皆知る  
所なり、此際に於て誰か國の滅亡を夢みる者あらん、然るに詩人ホラスは同國人民を  
警戒して曰く、

「汝羅馬國民よ、殘敗したる諸神の寺社堂宇、及び煤埃堆積せる諸神の影像を修  
營せずんば、必ずや祖先不信の罪を汝の頭上に受けん云々。」

國家の隆替の宗教の隆替に關連比例する事は、確乎として拔く能はず、瞭然として掩  
ふ能はざる事實なるが故に、彼のホラスは斯の如き治世に在りて、尙斯の如く叫ぶを  
得たるなり。

オグスト皇帝及其後嗣の皇帝は、同詩人の志によりて殿堂を修繕し、神像を鍍金した  
れども、其力能く宗教的信仰を臣民の心に喚起するを得ざりしが故に、道德は日一日  
に頹敗し、終に堂々たる帝國をして覆滅するに至らしむ。

嗚呼由來道義は天下の大道たり、千歳の昔し賢王サロモンは疾く既に道義興國を歌ひ  
たるにあらすや、然れども記せよ、其所謂道義なるものは果して何によりて維持せら  
るゝかを、余は固く信ず、宗教を除いて他に能く之を維持するに足る者なきを、是れ  
余が國家の隆替は宗教の隆替に關すと謂ふ所以にして、以上の歴史的事實は之を證し  
て餘りあるなり。

然らむ則ち、國を立つる者は、須らく古今の成敗に鑒みて、宗教の一事を蔑視すべき  
にあらざるなり、如何なる宗教と雖、有るは無きに優る萬々なり、蓋し多少の真理を  
含蓄せざる宗教は一も之なけれむなり、彼の希臘羅馬の人民の信奉したる宗教豈真教

なりと謂ふ可けんや、然れども其中に含蓄せられたる眞理は斯の如く國家に影響するを得たり、若夫れ渾体眞理を以て成立する我基督本教ならしめむ、其影響する所果して如何ぞや、嗚呼今日文明を以て稱せらるゝ國民たる者は、少しく茲に考へ、成るべく速に文明の宗教を選択して、天下盛衰の關する道義を維持獎勵せずんば、余は恐る、早晚羅馬帝國の覆轍を踏まんことを。

### 佛國の宗教亂

世に論者あり、奇怪の言を傳て曰く、基督公教の世を利するや大なり、然れども世を毒するも亦大なり、視よ、彼の宗教亂と稱して史上に殊筆大書せらるゝは、是れ其世を害毒したる著明の結果にわらずや云々と、宗教亂の三字甚だ其實を失す、然れども今假りに史家の言に従つて之を言はん、宗教亂中最も較明顯著にして、反對論者の最も攻撃する所の事跡は二あり、曰く「セム、バルタルミー」の虐殺、曰く「ナント」敕令の廢解即是なり、余は今正史に據りて此事跡を有りの儘に記述し、讀者それ自身をして公明正大なる判断を下さしめんと欲す。

### 第一「セム、バルタルミー」の虐殺

抑々佛國は由來基督公教國、事宗教上の利害に關するときは、如何なる事なりと雖、身を挺して此に當るを以て常とす、斯國にして斯人ある哉、カルウヰンなる者あり、新教首領の一人、紀元一千五百零九年同國ノアィオンに生る、素行修まらず、爲に國より放逐せらる、此時に當り彼のルーテルは、獨逸の各方に奔走して、頗りに宗教改革を絶叫す、カルウヰン佛國を去り、瑞西のバセルに往き、「プロテスタン」教の教理を文にして世に公にせんと欲す、初めは羅句語を以て、次に佛語を以て之を草す、一千五百三十五年稿成る、題して之を「基督教組織論」と云ふ、佛王フランソア一世に呈納せらるゝや、忽ち同國新教徒の經典と叫ぶるゝに至る、蓋し當時在朝貴族の風紀大に弛敗し、國民一半の風俗亦之に感染したるを以て、新奇の教訓は忽ち到る處に歡迎せられ、放逸好奇の徒、不平不満の輩の間に在りては、宛んど疾風の勢を以て行はるゝに至りたり、是に於て乎物議騒然、國內何となく不穩の狀あり、フランソア一世は活潑有爲の王、然れども其性少しく輕佻浮薄、故を以て新教徒を遇する往々一なら

す、政略上或は之を叱咤し或は之を慰撫して、寛嚴常なかりしを以て、此事亦頗る人民の激昂を促したり、然れども此時に當りては公教徒と新教徒との軋轢未だ甚しからず、徒らに區々の議論を戦はしたるまでなりしが、甲論乙駁、一は一非の間に兩教徒の心血漸次に熱騰し來り、茲に初めて禍機を藏し、早晚機會を待つて破烈せんず勢に立至りぬ、不幸にして機會は忽ち呈出せられたり、フランス第一世の嗣子ヘンリ第二世殂するに及び、其子フランス第二世年甫めて十七、其母カタリン、ド、メヂシス代つて國政を攝し、王の叔父フランス第一、ド、ギーズ侯、及其弟シャルル、ド、ロレンヌ教長を登用す、而して凡ての禍は二氏登用の點より胎胎し來りぬ、ナワル王は佛國の王家にして世に之をブルボン族と云ふ、當時ブルボン族に二人の兄弟あり、長をアントアン、ド、ブルボン、次をルイ、ド、コンデと稱す、俱に志を得ざるを以て深く王家を怨み、竊にギーズ侯を倒さんを図る、是に於て水師提督コリギ、及國內の新教徒と相結托す、コリギは同じく王家に志を得ざるを怨みし者、新教徒はギーズ侯の熱心に公教を擁護せるを憎みたる者、故を以て直に不滿のブルボン族と結托するに及びたり、斯の

如くして遂に史家の謂ふ有名なる宗教亂なるもの起りぬ、然れども讀者も是に於て知らん、其原因は全く王家に不滿なる公族一味の憤怒に在りて、宗教の如きは適々以て口實たるに過ぎざることを。

當時王宮はアンボアーズに在りたり、公族等先づギーズ侯を仆し、次に王宮を襲はんと欲し、應援を英國の女王エリザベス及獨逸の新教諸王に請ひたり、(國內の新教徒が外國と同盟して、又を自國に向けたるは、是を以て濫觴とす、)然るに事未だ發せずして、其謀蚤く泄れ、公族隱謀の巨魁ラルノヤーなる者先づ戮せられ、新教徒も亦概ね縛に就く、初め刑に處せられたるは主謀の徒のみ、然れども其後黨與再び王宮を襲はんとことを謀りたるが故に、終に盡く縊殺屠戮せらるゝに及びぬ、時正に紀元一千五百六十年、世に之を教法爭亂と稱する者あれども、其原因全く斯くの如くにして、加特力教の如きは毫も與り知らざる所、否同教徒中心ある者は兩教の孰れに關する者に對しても、坐ろに憫情を催ふして痛く茲に涕泣したり。

然るに其後一書途に奪はれ、新教徒の首唱となりて此亂を主謀したる者は、公族コン

デなること露顯したるが故に、氏は直に王庭に招致せられ、審案の上刑に處せられ、將に戮に就かんとするに際し、偶々王殂す、因て其生命を全ふするを得たり。王の殂するや、兩教徒の軋轢益々其熱度を高む、新教徒の首唱にはコリギイあり、コソアあり、公教徒の首領にはギース侯なりしが、此時アントアン、ド、ブルボン新教より公教に改宗して之に加はりぬ、時に新教徒の數日一日に増加し來り、爾來「フグノ」教徒と稱し、其勢頗る猖獗なり、先王の弟シャール第九世嗣いで至位に昇りたれども、未だ十歳の童子、皇太后カタリン、ド、メヂシヌ再び出で、國政の轡を握る、此女元來二十有五年の閨怨を喫し、飽く迄奸知隱謀に長けたる者、ギース侯の權勢の大なるを恐れ、竊に「フグノ」教徒に左袒して之に當らんと欲し、有名なるマキヤウ・ールの「治めんと欲せむ先づ離間の策を取れ」と云ふ政略を實施したり、今此女の爲す所を考ふるに、其目的全く己の怨望と貪欲とを満さんとしたるに外ならざるが如し。新教徒は皇太后の庇護を得て、其驕心人員と共に増長し、絶わす奸計を廻らして公教徒に抗せんと欲す、公教徒も亦疾くより茲に用意して、一矢之に酬ひんことを待望し

つゝありたるものゝ如し、兩教徒の憤懣愈々熱するに當り、不慮の一小事變は忽ち之が破裂を媒妙したり、偶々ギース侯從者を具して領邑ワツシーを過ぎ、彌撒聖祭を拜聽せんが爲に暫く此に停留す、此時「フグノ」教徒も亦公教の禮拜堂に接近せる倉廩に相集まり、堂内司祭が聖壇に近かんとする時刻を期し、故さら大聲を揚げて讚美歌を喧唱す、ギース侯從者を遣はし、聖祭の畢るまで唱歌の中絶を請はしむ、彼等肯んせず、時に候の從者中好奇の心に驅られて倉廩に攀り、私かに廩内の狀を覗ふ者あり、門守見て以て嘲笑罵詈に來れりと誤認し、大嚇一聲、太く叱咤す、叱咤は叱咤を以て答へらる、乍にして木石相打つに至る、罵々たり、擾々たり、候響を耳にし走せ來りて騷擾を鎮靜せんと欲す、然れども沸鼎の熱湯を一掬の水の冷却する所ならん、石片候の面に飛んで、流血淋漓たり、從者見て憤慨措く能はず、直に刀光を閃かして敵を亂打し、候の制聲を耳にせず、立るに三十人を殺し、其餘をして悉く狼狽四散せしむ、是れぞ即ち戰亂の端緒、爾來三十有二年間佛國の天をして陰雲慘愴悲風蕭條たらしめたるもの全く此に原因す、時實に紀元一千五百六十二年。

此虐殺の報一たび過大の言を以て國內に傳へらるゝや、新教徒は復仇の念勃然として起り、直に公族コンテを主謀に仰ぎ、是非を干戈に訴へんと欲す、初め王宮に臻りて王を欺き、叛逆の名を御袖の下に覆はんことを務められたるも、事成らず、因て其鬱勃の氣を晴さんが爲に、急にオルレアン、ツール、ボナエ、アンセー、フロシユル、ルアン、ブルジョ、リオン、グルノブル、其他幾多の大都小邑を陥落して、到る處に非常の暴行を逞ふし、或は聖堂を掠め、或は聖像を倒し、或は又聖体を潰し、古來諸聖の遺骨遺物等を若くは焼失し若くは放擲し、高德顯名の司祭道士等を若くは虐待し若くは酷殺して、亂暴狼籍抵らざる所なかりき、公教徒は此耻辱を受けて大に怒り、一躍憤然直に諸方に報復の擧を行ひたれども、狂亂せる新教徒の盲動を支ふるに力なし、こゝに於て乎ギーズ候とアントアン、ド、ブルボンの二將王師を假りて之を抑制せざるべからざる止むを得ざる勢に至りぬ、二將大擧して先づルアンを恢復す、此時アントアン、ド、ブルボン敵の彈丸に中りて死す、ギーズ候も亦將に敵黨の一人に暗殺せられんとす、危機一髪の際幸にして此者捕に就き、候の前に引出さる、候従容として之に問ふて曰く、

「爾恩怨なくして我を害せんとせるは何故ぞ」、答て曰く「我は唯我教の爲を計りし而已」、候若し爾の教人を殺さんことを命せむ、我教は人を殺さんことを命ず、往け、我れ爾に一命を與ふ云々。

候の寛大なる往々斯の如し、王師ルアンを出で、ドルーに向ふ、地はパリを距る十五里、此に於て大に新教徒と戦ひ、勝を獲て公族コンテを擒はず、コリギイ殘兵を將てオルレアンに逃走す、候逃るを逐ふてオルレアンを圍み、金鼓將に鳴り兵刃正に接せんとす、偶々ポルトロ、ド、メレ毒丸を放つて候を射る、其肩に中つ、世之を以てコリギイの使しむる所とす、射者亦自から其囑を受けたりと云ふ、コリギイ百方其然らざるを辯疏すれども、世の公論欺く能はず、今に至るまでコリギイの名ギーズ候の殺氣を帯びて、民の記憶に聯想せらる、候の子ヘンリ、ド、ギーズ是より不倶戴天を誓ひ、父の讎を報せずんを死すとも瞑せずと言ふ、彼果して其志を遂げたる事吾人後條に於て之を見る、我基督公教は勿論此報復の擧を嘉せず、否寧ろ痛く之を筆誅す、唯夫れ其父

が己を害せんとしたる敵を放したる天空海潤の雅量は、噴々賞して止まず、蓋し「敵をも愛せ」の教旨を遂行したる真誠の公教信徒たれをなり、然れども記せよ、若し其子ヘンリの行爲にして貶すべきありとせむ、新教徒はコリギイ、ポルトロ、ド、メレの行爲を以て、一點間然すべきなしと斷言するを得るや否や、這般の事須らく公平無私の眼を以て裁すべきなり。

勇將ギーズ候の一死は、公教徒の志氣を大に沮喪せしむ、公教徒の沮喪は、一敗地に塗れたる新教徒をして再び堀起せしむ、是に於て乎新教徒に信教自由の敕令を下さるべからざるに至りぬ、令下りて和議玆に成る、時實に紀元一千五百六十三年三月十二日、然れども和は一朝のみ、疑心暗鬼は常に兩教徒の念頭を往來して、永く和氣霽然たる春を見せしめざりき、彼れ新教徒一を得て二を望む、和約の章程に満足せず、更に又權柄勢位を得んと欲す、又々王を生擒せんことを企圖す、時王宮モ一の近傍に在り、シャルル第九世漸く十七歳、之を聞き戦はずして蒙塵す、然れども此舉太く王の逆鱗に觸れ、王をして終焉之を忘る能はざらしむ、新教徒王を逐ふてパリに到る、王

師の將モンモンシイ撃て之を破る、惜哉己れ亦瑞西人の射殺する所となりぬ、怪む勿れ、瑞西人の之を射殺したるを、彼等新教徒は毎々外國と同盟して自國に反抗したるものなり、皇太后カタリン、ド、メヂンス叛民の勢を怖れて復た和約を結ぶ、時實に紀元一千五百六十八年三月二十七日、然るに六ヶ月を出でずして和破れ、戦亂一層猛烈を極む、何れの民か兵士たらざらん、何れの地か戰場たらざらん、民皆武器を握りて、鬪國殺氣に鎖ざる、頽敗極まつて陰雲慘たり、是に於て乎王の弟アンヌ候出で、叛民と戦ひ、シャルナツクの没に於て大に之を破る、時正に紀元一千五百六十九年三月十三日なり。

コンデ倒れて馬より墜つ、モンテスキユ彈丸を射て其頭に中つ、公の死の毫も新教徒の氣勢を挫かざりしは、尙水師提督コリギイの在る有れをなり、コリギイは才幹に於ても、野望に於ても、敢てコンデ公に一籌を輸せざるもの、代つて將となり、再び戦を開く、然れども時運既に遅し、新教徒はモンコントールの戦に大敗し、復た再び起つ勇氣なかりき、然るに何事ぞ公教徒の首領間の怨隙は敵の幸福便宜を計るに至り

たり、兄弟壻に闘き、敵黨其隙に乗ずるは、古來往々然り、新教徒は其間にロレンス、  
 シヤリテ、モントパン、コニャックの四邑を獲、進んで諸官職に登るの權利を得るに及  
 びぬ、蓋し皇太后が斯の如き特典を新教徒に與へたるは、引て以て己の黨與となさん  
 が爲にてありぬ、後の最も引かんことを欲したるは水師提督コリギイにありたり、然  
 れどもコリギイは後の意に従はず、斷然パリに上るを拒みたる事幾んど二星期、偶々  
 此時西班牙と戦端を開く、后之を口實となし、軍を指揮する者はコリギイにあらざし  
 て誰ぞと云ふ語調を以て、漸く其意を曲ぐるを得たり、恰も好し此時王妹と故アント  
 アン、ド、ブルボンの子ヘンリとの結婚式執行せらる、事コリギイをして起たしむる  
 好機會となりたり、後の意に以爲らく若しコリギイを引かむ、新教徒を使役して我益  
 を計らしむる洵に易々たらんと、されども后は誤りたり、何ぞや、シャル第九世は  
 資性暗弱、人を治めんよりは治めらるゝに適せる者、而してコリギイは王が幼より其  
 母の攝政の下に在りたるを疾より洞知したる者、此際斷然王をして皇太后の攝政を復  
 せしめんと欲し、屢々王に面謁するを以て好機會となし、毎に牝雞の晨するは王の耻辱

なるを説き、終に首尾よく王をして自から政柄を握らしむるに至りたり、是れ或はコ  
 リギイが王を籠絡して、新教徒の益を計らん爲なりしか、歴史は固より之を默々に附  
 せども、コリギイの計略と新教徒の舉動等に徴するときは、蓋し當らずと雖遠からざ  
 るなり、皇太后は是よりコリギイの權勢陰に陽に己を凌ぐを認め、加ふるに王の舉止  
 亦大に昔日に異りたるを見て、苦心經營、遂に復たコリギイを倒さんことを謀る、后  
 一日王に説て曰く、コリギイを信用するは國家の禍害なりと、左右亦后の鼻息を覗ひ、  
 説くにコリギイ潜越の志あるを以てす、王曰く爾後警戒せんと、然れども后の心此に  
 安んずる能はず、騎士モルウェールに金を賄はしめ、コリギイがルウル殿より歸るを  
 待ち、民舎の窓より銃丸を放つて之を要撃せしむ、丸其腕に中り、痛く創を受く、王  
 變を聞てコリギイの邸に幸し、自から其病を慰問して兇人を罪に行はんことを約す、后  
 事の發覺せんを恐れ、直に在廷の臣を會し、速に事局を結むんを謀る、因て王に説て  
 曰く、コリギイ隱謀の事掩ふ可からず、彼現に獨逸に二萬の兵を請へり、部下の新教  
 徒今や之が企圖に汲々たり、今に當り速に事を處せずん心禍或は測る可からざるもの

あらん云々と、王弟アマツコ侯も亦后と謀を通じて之を賛す、王初めはコリギイの爲に兇人を除かんことを約したれども、其資性の傾く處遂に意を枉げて母后の説を容るゝに至りぬ、是に於て乎后の黨與は一日を出でずして國內に肉飛び血迸る一大悲劇を演ずるに及び、史家の所謂「セン、バルテルミー」の虐殺といふもの即是なり、蓋し同名聖人の祭日に行はれたるを以て此名あり、此事の囑托を受けたる者は余の前記せるヘンリ、ド、ギース侯にして、乃ちコリギイと不倶戴天を誓ひたる者にてありたり、紀元一千五百七十二年八月廿四日の曉天、ルウル殿最近の寺鐘正に第二次を報じ、東天漸く將に曙なんとせる時、即是れ此殘逆なる一大悲劇の序幕開かれたり、此時ヘンリ侯は天覆地載俱に相立たざらんと失ひたる怨敵コリギイの邸に臻り、人をして戸を敲かしむ、須臾にして戸開く、侯の兵躍つてコリギイの病床に迫り、刃を其胸に刺み、屍を窓外に投ず、同時に新教徒の家に闖入したる兵は、老幼男女を問はず、盡く之を屠殺す、赦されたるは公族のみ、而して殘逆の餘波は遠く延て國の四方に及び、慘憺たる陰雲闇國を包むに至りぬ、嗚呼是れ實に邦家の爲に長大息すべき一大兇變にてありたり。

事の實況此の如し、余は敢て之を是非せず、讀者自から公平無私の斷あらん、然れども尙茲に數個の注目すべきものあり、記して以て讀者の參考に供せんとす。

(第一)シャル第九世の此虐殺に同意したるは、母后の威迫已むを得ざるに出でたる者にして、決して其本意にあらざりし事、又若し事自己の生命に關し、邦家の安危に繋るが如く説かれずんば、決して之を諾するに至らざりし事、是れ既に王の妹マルガリットも其日記の中に明に録したる所なり、(ヘンリ第四世の後にして後日フランスの國母と稱せられたるものなり)。

(第二)此命は單にパリ府に行はるべきもの、而かも皇太后一味の議は新教徒の主長と叛逆の黨與のみを殺戮するに在りたり、然るに激昂せる無知の人民は、反動の生ずる所、后一味の意を察せずして、虐殺を國の四方に逞ふするに至りたる事、是又嘗て此議に與りて之を賛したる元帥タソヌの一子の記録する所なり。

(第三)新教徒を虐殺する命の國內に發布せられたりと云ふは、毫も證據する所なき言



なり、却て反對の王命は八月二十四日虐殺の行はれたる當日各地方の知事に降りて、虐殺の餘波、延ひて國內に及むしめざらんことを警告したり、(トルトラの佛國史の記する所)、惜哉王命は用を爲さざりき、蓋しその到達期を失したれをなり、地方によりては愚民の反動を制する力なかりき、史家常に言ふ、同日新徒教を虐殺する命令豫め各地方に降りたりと、然れども此事は、各地方に行はれたる虐殺の期日を對照比較して、明かに知るを得、例せむバリの近地モーに於ては虐殺の行はれたるは八月二十五日なりと云ふ、而してシャリテに於ては同二十六日、オルレアンに於ては同二十七日、リオンに於ては同三十日、ツルーズに於ては漸く九月二十三日、又ホルドーに於ては十月三日なりと、其月日を異にせるを見るときは、全く激動せる愚民の暴舉が、宛も堤防を決せる逆浪の如く、近きより遠きに汎濫し、公教徒の仇怨の尤も深かりし地に於て、尤も猖獗の勢を逞ふしたる事は、一目瞭然たり、宜なる哉新教徒が尤も殘逆なる殺戮に遇ひたる地は、一のニームを除くの外、他は皆彼等の嘗て横行して亂暴狼籍を極めたる土地なること、是に由りて之を觀れを、國內に行はれたる同虐殺は、十有年來怨を藏したる民の復讐心、上よりの命令もなく、外よりの誘導もなくして、之を行はたること愈々以て疑ふ可かざるなり。

(第四)此際公教反對論者の公平ならざる所は、同教徒中より殘逆無法の徒のみを列擧して、當時中心相憐んで敵を保護したる者を或は黙々に附し、或は故さら之を掩蔽せんとすること是なり、尙此役に於て忘る可からざる事あり、獨り新教徒のみ禍を受けたるにあらず、公教徒の殺されたる者、亦決して鮮少ならざりしこと是なり、不逞の徒は此亂に乗じて暴を助け、怨を報ひて、往々富裕なる公教徒に加害したるを以て、此事大に同教徒の責を緩ふする者なくんむあらず、其外此暴亂の際に於て新教徒は多く避難所を公教徒の家を得たることは「カルウァン」教徒殉命記に於て、新教徒をれ自からも證明し置く所あり、例せむリオン府に於ては大司教の教館「セレスナン」及「コルドリエ」等の修院多く彼等を保護しぬ、又同府に於ては知事の不在に乗じて虐殺行はれたれども、其歸るや直に之を鎮定し、之が主謀の徒を求めて罪に行はんが爲め、銀百枚を懸賞しぬ、ツルーズに於ても修院之が避難所を供し、アルロユに於ては温良なる

公教徒敵を自宅に隠したり、リヲユにては知事の制する能はざる暴民を、司祭自ら出で、制したり、ロマン、トロア、ホルドー等の地方に於ては、司祭及其他の公教信徒に助けられて、意外の保護を受けたる者あること、是又「カルウヰン」教徒殉命記の録する所、ニームの如きは公教徒の尤も害を受けたる地、敵の慘酷なる殺戮に逢ひたると再三、死者の數實に鮮少ならず、然れども此日に當りては全く仇讎の念を忘れて、寧ろ敵を庇護せんことに汲々たりしなり、畢竟するに此役に於て眞誠なる公教徒は、到る處に「敵をも愛せよ」の語を實行し、皇太后の怒りと暴民の怨みの中より新教徒を救助したることは、掩ふ可からざる事實なり、然るに此役の虐殺を以て罪を公教の上に歸せんとするが如きは、忘恩も太甚しと謂はざるべからず、當時公教は世間何者よりも痛く茲に流涕し、深く此を譴責したるり、新教徒の史家に據りても、コリギ、輩を殺戮したるは、其理由全く政策上に在りて、宗教の如きは適々以て之が口實たるに過ぎずと云ふなり。

然れども人或は云はん、然らむ則ち羅馬教皇は何故此役に於て神に感謝して歡喜を表したるやと、曰く教皇は「セン、バルナルミー」の事變を以て「シャルル第九世の自から思料したる如く、王の生命に關し、國の安危に關する一大隱謀なり」と思考せり、然るに今や其隱謀發覺せられて、事全く平穩に歸したりとの報に接す、教皇曷んぞ歡喜して上帝に感謝せざるを得んや。

終りに臨み、余の特に一言し置かんと欲するものは、此役に殺戮せられたる者の員數なり、想ふに此事容易に斷言するを得ざらん、何となれを此點に就ては史家の記する所、往々相異なれをなり、但だ此際余の見て以て甚だ奇なりとするは、時代の推移するに従つて、殺戮せられたる者の員數益々増加し來たること是なり、試みに視よ、紀元一千五百四十年に生れ、一千六百〇八年に死したる史家ポアリニエル氏に據るときは、殺戮せられたる者の數は二萬有餘なりと云ふ、降つて一千五百五十三年に生れ、一千六百十七年に死したる史家ドチャ氏に據れを、殆んど三万なりと、尙降つて一千五百六十年に生れ、一千六百四十一年に死したる史家スルリ氏に據れを、七万なりと云ふ、尙又降つて一千六百〇五年に生れ、一千六百七十二年に死したる史家ペレンフィキス氏

に據れど、曰く其數十萬なりと、視よ、時代は斯の如く史家をして死者の数を増記せしめたり、而して今又「カルウキン」教徒殉命記なるものを閲するに、概記して三萬なりと云ふと雖、殺戮せられたる地名に準じて查するときは、一萬五千百三十八なり、尙殺戮せられたる人名を擧げて記するときは、七百八十六に止まる、其表實に左の如し。

殺戮せられたる地名	殺戮せられたる員數	人名を掲げて調査したる員數
パリ	一、〇〇〇、調査して四六八、	一五二、
モイ	二二五、	三〇、
トロア	三七、	三七、
オルレアン	一、八五〇、	一五六、
ブルサユ	二三、	二三、
ラ、ンヤリテ	二〇、	一〇、
リオン	一、八〇〇、	一四四、
ソムル及びアンマニ	二六、	八、

ロマン	七、	七、
ルアン	六〇〇、	二二二、
ツルーズ	三〇六、	〇
ホルド	二七四、	七、
總計	一五、一三八、	七八六、

史家の言と此表とを對照するときは、孰れか眞孰れか偽なるかを判別する能はず、然れども余の所見を以てするときは、「カルウキン」教徒殉命記の記する所、蓋し或は最も眞に近からんか、何となれを同書の著者の目的とする所は、正しく自教の爲に殉死したる者の名と數とを記載するに在るものなれを、其搜索する所、必ず遺漏なからんと思惟せらるれをなり、況んや同教相求むるの感情は、一人も多く掲載せんと欲するあるに於てをや、而して其記する所、概算してこそ三萬なりと云ふと雖、各地方に殉死したる人名を掲げて、詳細に調査するときは、其數實に僅々七百八十六に止まる、今假らば其中を採りて一萬五千百三十八なりとせむ、それ或は當らずと雖遠からざらんか、

勿論「人情」の點より觀するときは、是れ尙過分ならん、然れども此役や若し難すべき殘逆の跡ありとすれど、徳行の以て人を感せしめたるものも、亦鮮少なからざるを以て、須らく彼此相参照して之が是非を判せざる可からず、若し夫れ此役に於ける我加特力教に就いて是非すべきものあらざらん、讀者今は自ら判知するに難からざらん、蓋し余が此慘憺たる歴史を有りの儘記して茲に至りたるは、其目的全く此に在れどなり、余は此點に於ける公教反對論者の難問に對しても、此正直なる記述より外に良好の道はあらじと信するなり。

### 第二 「ナント」敕令の解廢

上下年代を異にして、過去の事跡を品評するは、最も困難の事業にして、又最も誤り易き事業なりとす、蓋し星霜の推移するに従つて、民人の思想も多少相異なるものあれどなり、「ナント」敕令解廢の一事が、十七世紀の學者と十九世紀の學者によりて、種々様々に解釋せられたるが如き、蓋し又此に職由せずんをあらざり、異なる世紀は異なる斷案を下さしむ、今の世に當り、昔者佛國が信教自由を新教徒より奪取し、同教徒をして

故國を立出づる場合に至らしめたる事を耳にするときは、如何にも奇怪千萬の如くに聞ゆるを以て、當時の狀況を知らざる者は、直に壓制の二字を以て之に冠せん、然れども是れ時世の然らしむる所、人情の免れざる所なれど已むなし、然らむ則ち、公平なる裁判を以て事を斷せんと欲せむ、須らく先づ其事の行はれたる當時に溯源して論究せざる可からず。

抑々當時に在りては、信教の自由なるものは、未だ何處にも許容せられずして、時の人民は宗教と云ふときは、直に社會の基礎、幸福の源泉と見做したり、今日こそは信仰上議論を異にする者も、靄然たる和氣を含んで、同天地に生活するを妨げざれども、昔時は決して然らず、人民は未だ此の如き冷々淡々たる氣風に慣れ居らざりき、是故に宗教上一の新説出る毎に、未だ曾て一大激動を人心に與へざるはなし、而して其新説にして従來の信仰に背戾するあらんか、騒亂起て國擾々たるに至りたるや必せり、中古近古の世に當りては、公然傳播せられたる異端にして、戦亂争闘の媒材たらざりしものは、恐くは一も之なかるべし、「プロテスタン」教の新たに生出して歐洲諸國に

弘布せらるゝや、其結果亦實に斯の如くにてありき、而して同教も亦到る處に叛亂の氣を帯びて顯出したるが故に、一方に於て叛逆を煽動すると同時に、他の一方よりは非常の反動を招きたるものなり、佛王ヘンリ第二世が一千五百五十一年に當り、一の敕令を發して新教徒を抑制し、其教の弘布を禁遏せんとしたるもの、全く此に職由したるなり。

然るに新教徒は此勅令あるにも係らず、コリギイ、コンヂを始とし、其他野心怨望を懷ける者を恃んで、毫も其教の弘布を中絶せず、却て進んでパリ府に來り、公然之を唱道しぬ、甚しきに至りては、各府縣より代議士を都に派して、總會を開き、四十條の憲法を制定せしめたる後、自國の王意に反して之を擁護せんが爲め、援勢を獨逸の王公に求むるに至りぬ、此時よりして佛國の新教徒は、隱然國家の内に亦一の國家を構成するに及べり、而してヘンリ第二世は此内亂の將に破裂せんとする際に臨み、俄然殞逝したり、時正に一千五百五十九年、余は前條に於て、此内亂が如何なる勢を以て其後嗣シャルル第九世の代に激發したるや、新教徒は如何なる意を以て王宮を襲はん

ことを企圖したるや、佛國の社會は如何なる原因によりて再三戰亂の陰雲に籠られたるや、遂に「セン、ハルタルミー」の虐殺に於て如何なる悲劇演出せられたるやの事に至る迄、簡明に記述しぬ。

シャルル第九世の卒するや（一千五百七十四年）、戰亂復た起る、其勢の激烈なる前年に倍す、ヘンリ第三世の世に當りては、紛々擾々として中原の鹿誰の手に歸するやを知る能はざらしむ、衰頹萎靡、支離滅裂、眞個に聖經の所謂「凡て分離せる邦國は、衰滅に歸せん云々」の實況を呈しぬ、此際國は西王ヒリップ第二世の手に落ちて、永く西班牙の領に歸せんこと、蓋し間一髪のみ、然れども天運未だ盡きざりけん、幸にして愛國の忠情は公教的信仰と共に、耿々として時民の胸間に燃へたり、ヘンリ第三世に子なし、王位は系統によりてナワルの王ヘンリに歸すべかりき、然れどもヘンリは新教徒なり、民之を戴くを欲せず、一齊に誓つて曰く新教徒の君は、我等佛國臣民の戴くを欲せざる所と、此に於てヘンリと新教徒とを排斥せんが爲に、公教同盟軍なるものを組織す、偶々佛王ヘンリ第三世、刺客の爲に刺されぬ、因て戰國はナワル王

ヘンリと公教同盟軍との間に開かる、ヘンリは勇猛精練の武人、一千五百八十九年より一千五百九十年に至り、再三戦捷を得たるを以て、進んでパリ都城を圍まんどす、此秋に際し都民皆兵士となる、誓つて曰く、邪教の君に降伏せんよりは、寧ろ死ある而已ど、城圍の内に入りて、毫も挫折せず、城中糧盡き、居民の餓死するもの萬を以て數ふ、然れども、猶固く守りて降るを欲せず、ヘンリ之を見、深く都民殉教の義勇に感じ、或は城中の窮民を招きて、己が陣中に養ひ、或は兵卒をして時に糧食を城中に携入るを許し、且諒げて曰く「我は死民の上に王たるを欲せず」と、又曰く「今や我れサロモン<sup>(昔サロモン二母の訟を聴き、子を裂て之を兩母に與へんこと、爲母直に之を許す、)</sup>の世の眞母に類す、我れ今支離滅裂のパリを獲んよりは寧ろ之を有せざらんことを望む」<sup>(時に眞母倉皇之を止め、生干を全ふして偽母に與へんことを乞ひたる事あり、)</sup>然れども猩風血雨はパリ城中に飛散し、慘憺たる光景實に見るに忍びざりける、道上伏屍積んで山を成せども、敢て一人之を葬ひる者なく、到る處牛馬猫犬の上に積骸の累々たるを見る、或は墓中の枯骨を収めて麵包を製せんと試みる者あり、或は母にして其愛兒を喰ふが如き者ありて、修羅の現状毛髮悚然、膚上粟を生ずるに至るも、更に一人

降伏を夢みるものなし、是に於て乎ヘンリ深く自ら思惟すらく、我れ永く新教徒となりて、祖先の教に復歸せざるときは、佛國の君とすることを得ざるべしと、因て初めて茲に公教に歸順する意を起しぬ、名臣ユルリ(後にヘンリの大宰相となる)亦王に説いて、今の改宗を勧めたるを以て、今や當に利害の概念のみならず、其良心又實に改宗の可なるを識認するに至りぬ、此際他の公族の如きも多く公教に改宗したるも、往々是れ政略上爲にするところありて然りし者、眞誠の改宗とは謂ふべからず、ヘンリは是れより博識高見なる神學者を招致して、竊に公教の教理を研究し、其改宗の權謀に出でざるを證明したる後、遂に歴代佛王墳墓の在るセン、ドニス聖殿に至り、パリの名族の目前に於て、公然其の新教を誓棄することを衆に告ぐ、是れ實に紀元一千五百九十三年七月二十五日なり、嚮にヘンリに反抗したる人民、此時仇怨の心頓に解けて、歡聲洋々の裡に之を祝したり、翌年(一千五百九十四年三月廿二日)ヘンリの儀装を整へてパリに入らんとするや、神と王とに忠誠なる此民は、忽城門を開て之を歓迎し、雀躍欣舞、聖壽萬歳を叫呼して、之に謁見せんとせしかと、ヘンリ其忠情に

太く感銘し、務めて寛大を示して語つて曰く「都民は余の面貌を見んことを欲せむ、請ふ善く之を視せしめよ、彼等今や王あらんことを渴望す」と、然りヘンリ第四世によりて久しく戦雲に圍繞されたる佛國も、茲に王政復古の美譽を見るに至りたり、天下安泰、國家繁榮の萌芽したるもの、又實に茲に在りて、佛國の爲には史上に殊筆大書すべき新世紀なりき。

ヘンリ第四世の御宇は最も光榮なる治世にして、其名今仍同國人民の記憶に印せらる、王の内外に奏したる功業は頗る偉大なり、戦亂を鎮靜し、財政を整理し、農業に、工業に、商業に一大奨勵を與へたるが如きは、其内に對せる功業の尤も著しきものなり、榮譽なる戦捷を西班牙に占め、一千五百九十八年の亂に略取せられたる都邑を悉く恢復したるが如きは、其外に對せる功勞の最も大なるもの歟、是に於て佛國の命運は益々隆昌の域に赴きぬ、王の既に即位するに至りては、公教徒の同盟軍なる者は、全く其用を失したるを以て、忽ち茲に解散するに及びぬ、然れども此同盟軍の邦家に福したる事は、歴史上掩ふ可からざる事實なり、由來佛國は公教によりて繁榮し、公教に

よりて富強になりたるものなり、惜哉王の思の茲に到らざりしや、國內の和平を謀らんが爲に、其嘗て首將たりし新教徒を慰撫して、其歡心を收むるは、刻下の急務なりと思惟しぬ、是に於て乎有名なる「ナント」敕令の發布せらるゝを見るに至りたり、發布は紀元一千五百九十八年四月に當る、同敕令は新教徒に信教の自由と就官の權利を與へたる而已に止まらず、其信奉せる教法を擁護し、其享受したる位地を鞏固ならしめんが爲に、隨時に總會を開き、信徒に租税を課する等の特權をも與へたるが故に、事豫想の外に出で、王國の下に忽ち又一の王國を形成する姿となりぬ、勿論當時に在りては、此廣大なる特權の邦家を攪亂する禍因となるべきを洞知したる者はなければども、從來國家の基礎となり來れる唯一の宗教が、忽ち茲に犠牲に供せらるゝに至りたるを見て、喫驚慨嘆せざる者は之なかりき、故に時の議會の如きも、率先叫聲を放つて其敕令に反抗したり、然るに王は身躬から議會に出で、敕令發布の理由を演説し、簡言以て大に人心に感動を與へたるが故に、不圖多數の賛同を得るに至り、一時は四十年來佛國に禍したる粉々擾々の軋轢も茲に其終局を結ぶに至るかと思はれたり。

余の今更茲に呶々する迄もなく、「ナント」敕令の發布は國の奉教的良心と時の賢明なる人士に反抗矛盾したる事は、天下公衆の普く認むる所なり、當時の歴史までも、王の萬事を賭して和平を期したるを稱賛措かざるにも係らず、同敕令の發布を以て政略上の失當に出でたりと斷言せざるはなかりき、蓋し是により帝王の權利と國家の安寧秩序は益々危殆に頻したるを以てなり、果せる哉彼の新教徒は同敕令の許容せる所に満足せず、聲援を海外の王民に請ふて、始終國內を騷擾せしめたり、之を観るときは、ルイ第十三世の宰臣カルヂナル、リシュリウが、滿腔の智能と畢生の力量を傾けて、同教徒を強從壓服せしめたるは、勢の已む可からざりしを見るなり、紀元一千六百四十二年ルイ第十四世の世に至り、信教上的一致全く壊裂して、凡百の禍害皆此より胎胷し來り、慘憺たる陰雲全く佛國の天地を圍繞するに及びたるを以て、海外諸國の君王孰れも此般鑑に鑒みて、同一の禍害を未萌に避けんが爲に、極力以て信教上的一致を維持するに務めたり、是を以て新敎國の君王は自國に行はるゝ公教を撲滅せんと欲し、公敎國の君王も亦自國に行はるゝ新敎を排斥せんと欲し、彼此相共に信仰一致の

策に汲々たるに當り、適々佛國の王ルイ第十四世は、不生出の才を抱き、歐洲各國に戰捷を獲て、其光榮絶頂に達したるが故に、遂に「ヘンリ」第四世の發布したる「ナント」敕令の廢解を企てたり、是より先き理非を説いて新教徒を公教に歸順せしめんと務めたる者ありて、貴顯の士爲に多く公教に歸依するに至りしが、此時王は新教徒に迫り「ナント」敕令によりて享有したる二三の持權を返上せしめたりしに、臣下徃々其苛酷の處分を稱揚して、事誠に好結果ありたりと過大に褒めたる爲め、遂に王をして敕令の全部を廢解するに決せしめたり、反對論者が今日吾人に難する所は即ち此廢解なり、然れども記せよ、同敕令は其發布の當時太く反抗を受けたるものなるが故に、其廢解せらるゝに當りてや、大賛成を以て衆民に歡迎せられたるを、當時の史家は一人として之を賛成せざる者なし、今日其記する所を見るに、皆是れ敕令廢解を賛する辭のみ、偶々之を非毀したる者あれど、是れ吏の王命を施行するに當り、苛酷に失したる所あるが爲なり、例せば彼の戰將ルウ・アなる者は、セウ・エヌ、ラングドック等に於て、剩り殘酷の處分を新教徒の上に施したり、故に當時の人も之を見て、虐待は人を改遷せしむる



道にあらずと反叫したる者あり、而して斯く反叫したる者は誰となす、時の政治家か、曰く然らず、今日反對論者より此點に就て非難せらる、我加特力教の司教及王の配偶マントノン(故あつて后と稱せず、新教より公教に歸誠したる者)にてありたり、當時多くの民國を出で、外國に移住するに至りたりと云ふは、即ち此反叫を受けたる殘逆の處分の然らしめたる所なり、有名なる「ナント」教令廢解の歴史は其大略此の如し、新教の史家及我加特力教に反對する作家は、往々事を過大に記して以て後世に傳へたるが爲め、知らざる者は以て事實となす、誤れるなり。

余は敢て右の事實に是非の評論を下さんとするにあらず、然れども正意の在る所は充分之を陳せずんばならず。

(第一)論者曰く、同教令廢解の處分は、公教の專斷壓制に出でたりと、殊に知らず、我加特力教の如きは初めより之に關せずして、事全く政治上の策略に出でたるを、政治上の策略に出でたりと云ふと雖、時王の專斷壓制に歸すべきにはあらずして、寧ろ其罪を新教徒の潜越に嫁すべきなり、當時百餘年間に於ける彼等の舉動は、確に國王

に反旗を翻して、王政を轉覆せんとしたるを證明す、時の國王、時の宰臣は歷々として之を指示摘發するを得たり、勿論忠良なる民が多く國を出で、海外に移住するに至りたるを見るときは、王の所爲全く間然する所なしとは謂ふを得ざれども、彼等新教徒が二百十五年來絶えず國內に争亂を醸生したるを考ふるときは、王の所爲も亦時に取つて須要なりし外科的手術と看取するを得るなり、悲痛は悲痛なり、然れども國民の全体を救ふに當りては、是非其一部に此術を施さるべからず、乃ち知る、此悲痛なる手術は却て將來の大禍を豫防する權道なることを。

(第二)論者の言に據るときは、當時海外に移住したる民數頗る過大なり、此事に就ては史家の記する所一ならず、其最も過大にせる史家は云ふ、當時移住の民數二百萬以上に達すと、然れども此時同國には此の如く過多なる新教徒在らざりしを奈何せん、ルミニー氏は曰く、八十萬なりと、バナーシュ氏は曰く、三十萬乃至四十萬ならんと、而してド、ラルリー氏は曰く、二十萬に過ぎずと、今新教徒の避難せるメネズ、ブランドポール、デンマルク、ホランド、アングルタール等の各國各地に就て調査するに、

僅々四萬八千に出でず、良し調査に遺漏ありと假定するも、決して五萬以上には達せざるべし、論者の言の如きは、夢寐にも想起せられざるなり。

(第三)論者又云ふ、當時移住民は多額の金圓を携帶して國を出でたりと、然れども當時の實際を考ふるときは、事一目の下に疑かなり、此時佛國には人口二千萬、金額は五億萬、若し國民の移住したる者五萬に過ぎずとせむ、其携帶したる金額略ぼ推知するを得るなり。

(第四)論者の言に據るときは、此時工業商業等の衰頹極まれりと、然れども請ふ少しく考察せよ、當時國內は多年の争亂によりて、工業の發達非常に遲滞せり、是故にルイ第十四世の盛世に至りても、佛國の工業は他國の工業程に進歩せざりしなり、然るを則ち、初めより國內に有らざりし工業、移住民によりて國外に持し去らるゝの理あらんや、商業に至りては、十七世紀より十八世紀に互る經費を一瞥せむ、國民の移住が何程まで同業の發達を阻碍するを得たるか、一目瞭然たらん。

余は是等の詰問を見て、奇怪の念に堪へざる事あり、何ぞや、斯く佛國當時の衰頹を

喋々する者は、十把一束、皆是れ同國仇怨の史家なる事是れなり、今其中より一人を指名せん乎、ウァルタール、然り、彼の有名なるウァルタール其人なり、氏は實に當時の事跡を過大にして、ルイ第十四世に最も反抗の叫聲を放ちたる者なり、然れども人若し氏の舉動を知らむ、其反抗の理非は、無言の中に自から答あらん。

余は一步を假して立論す、良し反對論者の叫聲にして事實なりとするも、一國の君臣たる者には國家の安寧秩序を維持する權利と義務なしと謂ふを得べきか、又論ず、王の處分にして罪すべき跡ありとせむ、誰か王をして此罪すべき處分をなさしめたる、公教徒か、將た新教徒か、青史を繕け、王の處分の苛酷に失したるを非認したる者、筆誅したる者は新教徒にはあらずして公教徒なるを知らん、尙一步を譲りて立言せん、王をして苛酷の處分に出でしめたる者新教徒のみならず、公教徒の如きも幾分之に關與すと假定するも、反對論者の如く、罪を獨り公教徒のみに嫁して、新教徒の如きは與り知らざる者の如く言做すは、果して其當を得たる言と謂ふべきか、余は反對論者の爲に計る、須らく此殘逆なる歴史を黙々に附せよ、然らずんば藪を突いて蛇を出すの

失態あらん、天に向つて睡するの愚を示さん。

### 信仰と神學と科學との關係區劃

論者曰く、歐洲の大學校には神科大學ありて、教授の中には有力なる神學者なきにしもあらず、然れども有力なる神學者も其有力なりと稱するは、其信仰の力を指すにあらずして、其學術上の力を指すなり、換言すれば、或は耶蘇の傳若くは耶蘇敎史の著者として、或は希伯拉語の探求家として、或は宗教哲學の專門家として、世に顯れたるものは之れあり、然れども今日純粹なる神學者即ち既定信者なる一點によりて學者間に稱揚せらるゝものは、蓋し一人も之あることなきなりと。

論者は信仰、神學、科學の三者を混同す、宜なる哉此言あるや、請ふ左に三者の關係と區別とを辨明し、除るに正意の在るところを示さん。

(一) 信仰とは何ぞ、曰く既定せられたる敎理を辨明證論の上確固不拔なりと信認するを謂ふ、實際の上より觀察して言ふときは、人の生涯を規し、其言動をして其所信を一致せしむる力を有するもの是なり。

(二) 神學とは何ぞ、敎理に對する信仰の合理なると必要なる理由を探究論定する學にして、同敎理の性質を證明し、同敎理の眞意を明示し、同敎理に反對する難問異說に答辨し、又も同敎理の含有する總ての結論後項を推理的に割り出し、之を小にしては人々個々の言動の上に應用し、之を大にしては天下國家の制理の上に實施するに在り。

(三) 科學は何ぞや、他なし、宇宙萬象の理を發揮し、幽明二界に潜める眞理を探究する學是なり、蓋し世界の萬象は、聖經記する如く、人々の議論に任せらるるれをなり、是に由りて之を觀れを、論者の言の如く、神學者として有力なりと稱せらるゝは、其信仰の力の爲にあらずして、其學術上の力の爲なることは申す迄もなし、何となれを信仰にして、果して吾人の定説の如しとせむ、敢て珍らしと稱するに足らざれをなり。苟も基督公敎を信奉する者、誰か信仰を有せざらん、學術に至ては然らず、基督公敎を信奉する者、皆之を有すと云ふ能はず、たゞ其中に神學者の如き者ありて、獨り之を有す、是れ其有力と稱せらるゝ所以なり。

然れども眞誠の神學者にして、兼て又百科の學に通曉すと云ふに至りては、決して珍らしき事ならず、世人は神學者と云へむ、往々其識見神學の一科に局するものと思惟す、誤れり、勿論神學者は神學を金城と崇め、鐵壁と頼て、身常に此に潜みつゝあり、然れども是れ豈此に籠城して、他に其力倆を伸ぶす能はざる爲ならんや、知らずや神學の金城は、四もに門戸ありて、優に百科の學界と相通するを、然れむ世の學者の知り得る所のもの、神學者豈之を知らざるの理あらんや、況んや神學者たるが故に百科の學に通曉するを得ずと云ふが如き理をや、余は寧ろ言ふ、神學者たるが故に百科の學に通曉せざる可からずと、何ぞや、神學者なるものは天啓の眞理を逐一證明し、場合によりては反對論者に向つて、他迄之を辨護せざるべからず、而して是れ豈百科の學に通曉せざる者の能くすべき所ならんや、故に神學者は勢ひ百科の學に通曉するを要する者なり、世人往々想像すらく、神學は他の學問に關係なく、孰々孤立するものならんと、特に知らず、其關係なく孤立すと想像する神學こそは正しく百科の學と密接の關係を有して、須臾も相離るべからざるものなるを、一例を擧げて之を示さんか、

神學は教へて曰く、世界の人民は皆均しく其起原を同ふすと、曰く眞誠の宗教は遠く天地剖判の當時より創立せらるると、曰く上帝は身躬ら此教を人に授けたりと、而して是等の事豈歴史によらずして證明し得る所ならんや、是に於て乎神學と歴史に於ける大關係を見るなり、請ふ一以て全を知れ、其天文學に於ける、其地質學に於ける、及其他の科學に於ける關係往々皆此の如し、故に言ふ、一の神學は萬學を有すと、少なくとも或る程度に於て。

然らむ則ち、世若し眞誠に神學者と稱するに足るべき者あらむ、其人世界の何處に潜伏するも、吾人は直ちに之を博學多識の大人物なりと稱揚するに躊躇せざるものなり、而かも其博學多識は最も正確にして、又最も秩序あるものたるや疑なし、何の謂ぞや、神學者の腦中には、其畜ふる學問順次相連貫して、皆一の神學に轉するが故に、排列其宜きを得て、萬學一途の用を爲すの謂なり、嗚呼這般の學者は、確かに是れ有力の人物なり、嗚呼確かに是れ世の學者に一頭を抜く人傑なり。

大學校に神學科を設置する可否

論者曰く、抑々哲學理學等を教授する大學中に於て同時に神學をも教授するは舊慣の然らしむる所と雖も、東洋人の眼を以て之を觀れど、撞着の甚しきものなりと謂ふを得べきなり、其故は哲學理學等の如き眞誠の科學は、初より既定的のものを有せず、先づ詮鑿して一種の理法を發明すれど、此の眞理を根據として他の理法を採求す、然るに神學は初めより既定的のものを有す云々と。

奇怪なる哉言や、歐洲の大學校は神學科を以て始まり、他の學科の如きは皆其後に加へられ、而かも神學の教授を補充する目的より加へられたることは、歷史上争ふ可からざる事實なるを知らざるか、今此歴史的事實に由りて立言するときは、大學校の教授は實に神學先づ主にして、他の科學は皆其客たりと云ふべし、然らむ則ち、その客たる哲學理學等の科學教授を先にして、主たる神學の教授を後にするが如き事すら、既に主客を顛倒し、先後を忘却したる議論なるに、今や哲學の婢事する神學の教授を全然拋棄して然るべしと言ふ、抑々何たる言ぞや。

右は歴史的事實より一言したるもの、今又退いて之を考ふるに、余は哲學理學等の科學と同時に、神學をも教授するは、其の何れの點に於て撞着するやを知る能はず、神學も、哲學の如く、亦是れ一の學問にはあらずや、然らむ學問たる點に於ては、彼此毫も異なる所なし、彼れも學問、此れも學問、學問を學問と同時に教授するは、撞着する事なるや、うれ學問とは先づ何ぞや、曰く、事物を採知する道なり、是に於て乎其採知する事物の千態萬狀なるに従つて、學問も亦種々様々なるべきを知るなり、天文學なる者あり、日月星辰の運行性質等を採知するものなるを知る、博物學なる者あり、動物、植物、礦物等を採求するものなるを知る、其れ此の如く、天地間に散在せる萬物は、皆各々學問の材となり、料となる、故に如何なる學問も、亦た皆自己の採求すべき事物を有せざるはなし、然らむ則ち、神學豈獨り其採求すべき材料を有せざるの理あらんや、然り、森羅萬有の中に尤も高崇なる、尤も尊榮なる、又尤も貴重なる者あり、之を神と稱す、天地萬物の造主にして、即ち是れ神學の採求する材となり、料となるものなり、凡そ宇宙間の事物は皆學んで以て益あり、知つて以て効ありとなさむ、大學校ども稱せらるゝ天下第一の教場に於て、區々たる自餘の事物の採求

教授にのみ元々として、森羅萬象の大元主、即ち天地間に散在して、他の學問の材料となる事々物々を創造したる神其者に就て、探求し教授するを否むが如きは、是れを實に撞着の最も甚しきものにはあらざるか、宜なる哉神學教授を棄放して、専ら他の科學教授にのみ従事せる世の學者の、徃々五里霧中に彷徨しつゝあるや、神學教授を省かんか、百科の學曷ぞ其れ解するを得ん、何んぞや、原因を放棄して、結果を探求すれどなり、世の學者の勞して効なきは、皆是れ原因を省いて、結果を探らんとするの罪に坐せずんをわらず、余故に言はんとす、神學の教授を放棄せむ、科學の教授は徒勞なり、骨折損の艸臥儲けなりと、敢て非理非道なりとは言はず、實際なれど苛酷なれど。

論者曰ふ、神學も亦是れ一の學問なりと雖、彼れは初より既定的のものを有する學問なり云々、然り、神學は既定的のものを有す、然れども他の學問も亦皆然るにわらずや、夫れ如何なる學問と雖、學問と云ふ以上は、皆是れ吾人が前條に概言したる「事物の探究格知」を意味せざるものはなし、然り而して、天地間に散在する事々物々は、萬

古同一にして決して變換すべきものにはわらず、視よ、俯仰宇宙の順序を視よ、彼れは古ありたる如く今も尙は斯くあるなり、勿論外觀景狀は星霜と共に多少變ずることあるも、其の稱して天地の大則、萬物の本性と云ふ者に至りては、千秋萬古同一なり、然るに學問なるものは正しく此千秋萬古同一なる大則本性を確知するに在るものなれど、苟も眞誠なる學問ならんには、如何なる學問と雖、皆其基本を既定の磐上に置かざる可からざるや明なり、否らすんを、吾人は學問にわらず、假定なり、臆説なり、未だ證明せられざる空々漠々たる推測なりと斷言す、見る可し、學問の基く所、愈々確立一定すれど、愈々茲に學問の學問たる名に價する事を、而して神學の基く所は何んぞ、確然一定、万世不易の一大眞理なり、然らむ則ち、神學こそは如何なる學問よりも學問の學問たる名に耻ぢざる學問と謂ふべきにはわらずや、(神學に於ても詮鑿に詮鑿し、研究に研究し、證明に證明したるものにわらざれど、決して之を根據的眞理と認承せざるは、余の言ふ迄もなき事)。

論者或は曰はん、他の科學は日々進歩すれども、神學は曾て進歩することなしと、嗚

呼果して是れあるか、請ふ先づ他の科學の如何にして進歩するかを視よ、必ずや左の二法に出でん、曰く發見、曰く應用是なり、既知のものを以て新たに未知のものを知認するに至る、茲に發見を見る、發明せられたる事物を以て、之を實際に施行す、茲に應用あるなり、例へば初めて蒸氣の力の強大なるを認む、是れ發明なり、此の強大なる力を船に施して汽船を造り、車に施して汽車を造る、是れ應用なり、科學の進歩する所以、皆此發見應用の進歩ならざるはなし、神學は如何、果して發見應用の進歩なきか、切言以て之を論ずるときは、神學特殊の講究物には、新たに發見するが如きことあらじ、何となれを神學は重もに天啓に根據するものにして、此天啓は一たび人に授與せらるゝや、永世持續して變易するものにあらざれとなり、神學者は、深く之を講究することを得、新たに増減することは得ず、故に神學には其特殊の講究物に於ける發明の進歩はなしと謂ふを得べし、然れども神學も亦科學に於ける發見の進歩に準じて、日々其範圍を擴張し行くことは、掩ふ可からざる事實なり、何を以て之を言ふや、凡そ科學上に發見せられたるものは、神學の爲に或は新たなる證左となりて、

其教義倫理を確かめ、或は新たなる難問となりて、其明快なる答辨を促さるものなけれむなり、若し夫れ神學應用の進歩に至りては、吾人日々之あるを見る、即ち各國人民の風俗の上に、政治社交の上に、百事綜錯して愈々頻繁を加へ來る程度に應じて、神學上の眞理の實施應用も、亦た愈々多々なるを見るに至るなり、蓋し人生の境遇、社會の難問は一として神學に就て其裁斷の力を求め、其證明の光を仰がざるものなけれむなり、人若しこれを知らんと欲せば、請ふ今代の教皇レオ第十三世陛下の教勅の書を見よ、陛下が古來沸鼎したる凡百の詰問に對し、今日提起せらるゝ社會の大問題に對し、一の神學を以て如何に明快なる答辨説明を下したるか、眼ある者は之を知らん、記して茲に到れむ、神學の教授と科學の教授とは、毫も撞着せざる而已ならず、科學の教授は神學の教授と須臾も相離る可からざるものにして、若し強て之を離さんどすれば、科學は目なき人跡、光なき世界、方向なく管理なき一大機械の如きものとなり了はんのみ。

神學の既定する人性的神は科學の精神に戻らざる論證

論者曰く、神學は初めより人性的の神あるを既定す、眞誠の科學に於ては決して此の如きものを既定するを許さず、故に神學は科學にあらずして全く科學の精神に戻れり、神學は寧ろ一種の迷信より起れる僞學なりと謂ふを得べきなりと。

神學とは、其名稱に由りて知り得可きが如く、神の學に關する事項に就て講究する學問なり、尙明かに其何物たるを理會せんと欲せむ、須らく先づ其幾部に分たれあるかを考ふべし、古來神學者中に尤も錚々の名ある者は、往々之を三部に分つを常とす、即ち第一部は神に就て、第二部は人間に就て、第三部は神人の間に立て轉達和解せる者に就て講究す、人性的の神とは即ち此の神人兩間の轉達者を指すなり、此者實に人性的の神と云ふて可なり、蓋し眞誠の神にして、又眞誠の人なれむなり、(余は讀者をして左に論述する所を理會せしめんが爲に、一言茲に注意し置くべきことあり、他無なし、神は其性一にして、其位三なる事是なり、性一位三なりと云ふも、決して三神を意味するにあらず、俱に是れ獨一無二の眞神なり、而して人性的の神とは、乃ち此三位の第一に位する者にして、神性と人性とを混亂せずして兼有し、隨て眞誠の神なると同時

に又眞誠の人なり、一方よりは神の能力を以て言動し、他の一方よりは人間の靈肉を以て云爲す、夫れ既に眞誠の神にして又人なり、故に能く神人の中間に立つて轉達和解するを得たるなり、宜なる哉之が比類を地球上の人間の中に就て求めんと欲するも得べからざるや、彼は天下一あるべく、二あるべからざるなり、理學と雖、博物學と雖、其他の科學と雖、此の如き比類を舉げて示す能はず、是に於て乎初めて神學を待つ、是れ即ち人性的の神は神學特殊の講究する者となる所以なり。

然れども是あるが爲に神學は科學の精神に戻ると謂ひ得可きか、是あるが爲に此神的人物に關する一切の事項は科學の許さざる所なりと謂ひ得可きか、狭少なる哉論者の見や、居れ我れ汝に語らん、汝の所謂人性的の神は、果して生存せるものか、若し然りとせむ、何處に生存したるか、何れの時代に生存したるか、又其生存中如何なる事を爲したりしぞ、是れ實に人性的の神に就いて探究すべき第一着の問題なり、而して此問題を解釋して吾人に示すものは何ぞ、歴史是なり、然らむ則ち人性的の神の事項は歴史の許さざる處にあらざるを知るべし、既に歴史に由りて人性的の神の存在を確知する



を得て、其果して人性的神なりしか、換言せば、其果して眞誠の人にして又眞誠の神なりしかは、是れ第二段に起るべき問題ならん、何となれば人性は就いて見る可くも、神性は得て見る可からざれどもなり、然らば此問題を解釋せんと欲せば宜しく如何して可なる、須らく先づ其得て見る可き人性に就て、仔細に其言語、其行爲、及其人性的生涯に於て果して神の知能顯はれ居るや否やを考究せん事を要す、而して是等の事項を考究する者は何ぞ、哲學其物なり、然らば則ち人性的神の事項は哲學の許さるる所にあらざるを見るべし、既に此の如く歴史を以て、哲學を以て、人性的神の存在と、神知神能の言動證明せらるゝときは、神學の規定する人性的神は毫も神學の許さるる所にあらざるを知見すべきなり、随つて同人性的神に就て講究する神學は、毫も科學の精神に戻らざるのみならず、如何なる學問者よりも一層合理的なる、一層哲學的な基礎に確立し居るを見るに足るなり。

請ふ余をして以上の順を逐ふて左に詳論するを得せしめよ。

(第一)人性的神は果して實在せるか、余は云ふ、之が實在を打消すの難きは、豊公奈翁の存在を打消すの難きに百倍すと、今日此二豪漢の存在を證明する者一あらざり、耶穌基督と稱する人性的神の實在を證明する者、幾百千人あるを知らざるなり、耶穌基督は凡そ其己れに關する事と云はば、一舉一動より一語一默の末に至る迄、人の耳目に隠る能はざる時世に於て生存したる者なり、其一代の傳記なるものは、毛を吹いて彼れの失行を求めんと欲し、讒を構へて彼れの生命を害はんと欲し、終に彼れをして首尾よく磔上に悲惨の最後を遂げしめたる猶太人民の眼前に於て綴られたり、彼れ一生の言動は、死後數年ならずして、其教の普天率土に傳播せらるゝと同時に、偏く世界萬國の人民に知らされたり、爾來今日に至るまで殆んど二千年、其名萬國に稱せられ、其身萬民に拜せらるれども、他の一方より見るときは帝王の迫害、學者の攻撃、異教徒の暴行、頑民等の惡言等、皆一耶穌、一基督と稱する身上に蝟集累積し來りて、一身宛ながら敵敵萬怨の燒點の如くなり居ることは、余の今更暇々するを待たざる所、例は近く眼前に在るなり、耶穌と云ふ其名、耶穌教と云ふ其教、耶穌教徒と云ふ其教徒が、如何に世人より譏誣せられ、排斥せられつゝあるかを見む、蓋し思半々に過ぎん、

嗚呼彼れは眞に萬愛の燒點となりて、世界萬民の心線を一身に集むるが如く、又万怨の的鵠となりて、世界萬民の毒矢を一身に受くる者なれど、其彼れと此れとを相共に利用して、均しく己の實在を證明せしむるに至つては、豈亦妙用ならずや、是れ果して何の謂ぞや、他無し、其信徒をしては、己を尊拜せしめ、己に奉事せしめ、己を鑑鑑に仰がしめ、己の爲に身命を擲たしめて忠誠を盡さしめ、其仇敵をしては己を嫉視せしめ、己を窘迫せしめ、己を攻撃せしめ、己の尊嚴を冒瀆せしめ、有らゆる手段を以て己の名を人民の記憶中より除去するを許しつゝ、耶穌基督と稱する者が斯々の國、云々の代に實在したりと云ふ事實を天下に表白することを謂ふなり、是れ實に歴史あつて以來、最も正確なる、最も明白なる、又最も該通なる實際的活證者なりとす、是に由りて之を觀れど、耶穌基督と稱する人性的神なるものは、果して生存したるなり、嗚呼果して生存したるなり、之をしる生存せずと云はゞ、余は古來の聖賢、古來の豪傑皆是れ存在せざる者と斷言するに憚らざるなり。

(第二)耶穌基督は果して眞誠の人、眞誠の神たりしか、替言せど、吾人其人に就いて果して神の言動を識認するを得るか、其一代の傳記既に其生涯を吾人に示す以上は、理之を識認する難からず、請ふ先づ彼に就て左の三點を講究せよ、彼れ果して如何なる者なりしぞ(第一點)、其生涯に於て何を爲したりしぞ(第二點)、其死後に於て何を爲したりしぞ(第三點)。

(第一點)彼れ果して如何なる者なりしぞ、未だ耶穌基督の人と爲り如何を講究せざる者は、勿論其の何者たるを知る能はざるが故に、冷々に之を看過するを得べし、時に或は嘲笑を以て之を罵詈することも得べし、然れども人苟も潛心熟慮して彼れの人と爲り如何を考究せんと欲する者あらざ、恐くは非凡絶倫の彼に對して、感驚之を久ふせざる者はなけん、如何なる國民に屬する人物を擧げ、如何なる人種に係はる人傑を擧げ來るも、耶穌基督は全然之と異様の相貌を有す、然り實に一種特別の相貌を備ふる者なり、何となれを古往今來人物を以て稱せられ、人傑を以て目せられたる者は、如何に道德邵々聖人なりと雖、如何に心志高き傑士なりと雖、往々其一二の長所のみを以て稱揚せられたる者なり、例せば忠誠天地を感動せしめたる者は之あらん、至孝

頑冥を諧化したる者は之あらん、豪氣四海を席卷したる者は之あらん、節義一世を風靡したる者は之あらん、然れども總ての徳を一身に兼備して、一見相容れざる徳をも善く調和し、萬徳を均しく完全に修めて、長短優劣を其間に立つるを得せしめざる者は、振古以來たゞ一基督あるのみ、古來反對論者が毛を吹て其失行を求めんと欲するも、完全無缺にして一點の瑕瑾だも見る能はざる者は、實に天地剖判以來たゞ基督一人あるのみ、若し人ありて耶穌基督に間然すべき缺點ありと訴ふる者あらん、是れ未だ基督の言行如何を知了せざるが爲なり、天下は廣し、人民は多し、然れども「我は神なり」と自稱して、人より虚傲欺騙の攻撃を受けざる者は、恐くは基督たゞ一人ならん、何を以て虚傲欺騙の攻撃を受けざる、他無なし、口に「我は神の子なり」と稱して、行以て之を實ならしめられたれとなり、故に人若し虚心坦懐に基督の行爲を沈思熟考するときは、平素仇敵の地に立つ者と雖、其心事實に迫られて「然り、彼れ眞に神の子なり」の語を口外に發せざるを得ざるなり、況んや其信徒たる者に於てをや、嗚呼洵に斯言ありて斯行あるべく、斯行ありて斯言あるべし、良し無上至尊の天帝來りて人寰に住すと假定するも、此言此行より完全なる言行あるを得ざる可し、是れ此完全無缺の言行は、人目の前に炳然煥發するを以て、人心の善惡を明かに表白するものなり、何となれと善人ならんを必ず之を愛敬せざる可からず、惡人ならんを必ず之を嫉視せざる可からざれとなり、老翁メオンの先言是に於て乎應驗あるを見る、曰く「我目既に爾の萬民の前に備へられて……衆心を流露せしむるを見る」と。

(第二點)彼れ其生涯に於て何を爲したりとぞ 二あり、曰く開闢以來の預言を遂げて、神の全知を明表せる事、曰く不思議の神業を行ふて、神の萬能を發現したる事。

(其一)彼は開闢以來の預言を遂げて神の全知を明表したり。 二預言を遂行するの語、一見意なきが如く聞ゆれども、其實吾人の感驚すべき一大事業を意味して、彌々究むれ心彌々神知の在る所を明表す、何んぞや、彼は天地創造の當時より、先言せられたる凡百の事蹟を眇たる一身に擔ふて、僅々たる生涯に於て、細大遺さず漏さず之を完遂し、開闢以來四千年後に當りて、皆悉くこれが應驗を呈せしめたるを以てなり、抑々基督の此世に生出せる、豈にそれ偶然の結果ならんや、其生出實に尋常人の生出と日

を同ふして語る可からざるものあり、古來人は稱す、英雄豪傑の世に出る、必ずこれが兆ありと、然らむ則ち、世界の救済主基督の此世に降生せる、豈に亦之が前兆なくして可ならんや、果せる哉吾人、今聖書を繕て熟ら之を考ふるに、基督の降生は遠く既に天地剖判の當時より公約せられあるを見るなり、是れより以降地上の有生皆共に天の一方を瞻望して、其降生の一日も速ならんことを欲し、宛も大旱の雲霓を望むが如き位地に立てり、爾來其生出の公約は千遍萬回復言せられ、其生涯の事業は細大遺漏なく先言せられ、猶教主の希望を衆民の心中に涵養して、永く仰慕の念を降生の當時まで持續せしめんが爲に、地上の悉々たる民族の中より、故ら一民族を撰抜して、之が公約の付托者となし、之が預言の保護人となしたるを見る、マニヤの民若くはイヌラエルの民と稱する者即ち是れなり、此民の地上に生存したる所以と、天の此の民に對せる攝理とは、全く初めより教主の降生を仰望し、先づ自國に於て其生出を親見し、延て之を他國の人民に福音して、教主の生出するや否や、是れを則ち開闢以來地上生靈の矚目仰望したるものなりと云ふ事を天下に表白せしむるに在りたるを以て、

此民の生存の如きも、數百千年の久しきに亙りたる教主の一大預言其物と云つて不可なきなり、其後教主の教主たる所以を一層明かに天下後昆に知らしめん爲に、同教主に關する一切の事項を擧げて、悉く之を書に記載したる者は、又實に此民族なりとす、吾人今其書を一閱するに、凡る事教主に關するものは、皆數百千年の昔より、逐一明瞭に預言せられざるはなし、今左に其の概要を擧ぐれば、教主の如何なる苗裔に屬すべきや、如何なる母より生るべきや、其生出如何なる國土、如何なる年代、又如何なる國王の治世に當るべきや、長じて如何なる都邑に住すべきや、如何にして其天職を盡すべきや、其性如何に温良なるべきや、其の説く所の教如何に高尚なるべきや、其の行ふ所の奇蹟如何に多く且珍らしかるべきや、最後に如何なる道を以て死すべきや、如何なる刑に處せらるべきや、何人の手を以て敵に渡さる可きや、幾許の金を以て其身賣らるべきや、又其死後に來るべき事即ち其復活、其昇天、及其教會等の事項に至る迄、皆明白に、詳細に預記せられあるを以て、吾人をして教主基督の歴史は、其生れざる以前と、又其死せる以後に於て、前後二回書き記されたるが如き感あらしむ、

唯だ其前後の歴史に異なる所は、前者は一人の手、一代の下に編せられたるにあらずして、三十有餘人の作者が一千五百有餘年の久しき間に、新陳代謝して之を草したるに在り、是等の作者は往々東西其國を異にし、上下其の代を殊にしたれど、固より相共に謀じ合せて、氣脈を通じたるにあらず、又自他参照し彼此對比したるにもあらずして、たい各自其書かんと欲する心に任せて、直ちに筆を下したるものなり、所謂彼は彼、我は我として書き記したるものなり、然れども記せよ、「領言完遂」の感驚すべき一大事業と云ふ所以は、正しく茲に在るを、何んぞや、基督が是等の預言を遂げたりと云ふ僅々たる語句は、言語風俗を殊にしたる種々異様の作者の口より發して、上下一千五百有餘年の一大紙上に筆せられたるもの、而も其言ふところの事項は、教主無上の光榮と其無極の謙遜とに關し、往々相扞格して彼此相容れざるが如き感あるに係らず、四千年後に降生したる一の基督が、細大遺さず漏さず之を完遂し、僅々たる生涯に於て、一身以て皆之が應驗あらしめ、其將に十字架上に釘せられて氣息を絶たんとするに當り、「事皆遂げられたり」の語を絶叫するに至りたりと云ふことを意味

すれどなり、嗚呼眞に基督の十字架上に氣息を絶つと同時に、其身に關する古來千萬の預言は、片言隻句の遺漏もなく完成したり、然らば是等の事は單に歴史的觀察を以て、過去の一事跡として考ふるも、誰か神知の言動を其裡に認めざる者あらんや、故に若し人ありて此の如き預言を以て、神の聖計あつて發せられたるものにあらずと斷じ、又基督の此の如く之を完遂したるを以て、全く是れ偶然の結果、萬一の僥倖の然らしむるところなりと論ずるものあらんや、是れ何んぞ數千萬の針を取つて、偶然卓上に投じたる時、針それ自らが各々其位地に鑽立して、宛然名山大川を備へたる一の美國を現出したりと語るに異ならんや、否余は斯る譬喩も尙以て比するに足らずと信するものなり。

(其二)彼は不思議の神業を行ふて、神の萬能を發揚せり。||基督躬らも嘗て若翰洗者の弟子來りて、子はそれ古來生民の仰望したる者なるかと問ひける時、言語を以て之が諾否の應答をなさず、己の世に行ひたる神業を舉げて、之に答へたり、曰く「汝等往て其の親しく目撃したる所を語れ、盲は見、跛は歩し、聾は癒さる云々」と、又彼の猶

太の頑民が、偏僻執拗して飽迄其の説く所の教を排斥せんとしたる時にも、彼は唯だ天下萬衆の具瞻したる自己の行業を擧げて其迷夢を攪破したり、曰く「爾等若し我言を信せずんば、請ふ我行を信せよ」と、嗚呼實に基督の神妙至聖なる性行と、其の天下萬衆の前行ひたる神業は、彼の天より降りたることを證明するに於て、焯々として餘りあるなり、故に當時の良民の如きも、夙に之を承認したるが故に、南北東西より雲集霧合して、「古來未だ嘗て此人の如く語りたる者あらじ」と叫びぬ、蓋し彼が生れながらの旨者に卒然明を復したるが如きは、實に是れ時の人民が基督以前に於て聞見したることなき事實にてありたり、宜なる哉基督の仇敵其徒と雖、彼が行ひたる神妙不思議の事蹟に對しては、敢て容喙して之れが實在を埋没するに至らざりしや、蓋し彼は常に雲霞の如く圍繞せる群衆の面前に於て、此神妙不可思議の奇蹟を行ひたるを以て、彼等は是等群衆の耳目を瞶盲にせずんば之を打消すこと能はざりしなり、曾に之を打消す能はざる而已ならず、彼等も遂には「此者多く奇蹟を行ひたり」の語を口外に發して、公然之を自白するの已むを得ざるに至りぬ、耳聞目撃せる萬民を證左とする公

明正大の奇蹟は、固より當さに此の如くなるべし、去れど基督の行ひたる奇蹟を否定無視するが如きは、仇敵其徒と雖全く之を不能の一事と見做し、夢寐にだも之を否定するを想像せざりしが、唯だ其儘に之を放棄し置きて、袖手傍觀し居るときは、人民の心は日に月に彼に歸するを以て、已むを得ず茲に一時牽強附會の見解を下して、基督の奇蹟を行ふ力を魔力に歸せんと試みたれども、此時基督自身より直に説破され、且誠意正心なる良民の欺く可からざることを見て、奸策一變、遂に大膽にも基督を死地に陥ぬれんことを企てたり、その意に以爲らく、基督死せむ其奇蹟も其跡を絶たんと、是れ實に彼等が殘酷の手を以て、完全無缺一點の過失なき聖身を礎上に屠りたる所以なり、然れども記せよ、彼等の殘酷なる手は人間としての基督に害を加ふるゝを得たれども、神としての基督には、毫も手を觸るゝを得ざりしが故に、其企圖一沫の泡と消へ去りて、事却つて反對の結果を奏するに至りたるを、何となれを彼等の殘酷なる虐殺は、偶々以て空前絶後の一大奇蹟あらしむる機會となりたれをなり、空前絶後の一大奇蹟とは何ぞ、他無し、基督の死後三日の曉に、餘人ならず、正しく彼等の

虐殺したる基督其身の復活したる事是なり、是に於て乎、彼等は意外に打たれて、愕然吃驚しぬ、而して人民は益々基督の能力を感驚して、「彼れ眞に神の子たりき」と絶叫するに至りたるなり。

謂ふを止めよ、怪力亂神に信じ易く、欺かれ易きは、古代人民の常態、基督當時の人民の如きも、全く其神變奇術に眩惑したるものならんぞ、福音書存す、試みに就て之を一閱せよ、當時基督を仇敵視したる者は、如何に刮目警醒し、如何に苛探酷求し、又如何に嫉怨憎惡の私情に驅られて、姦知奸策に長けたりしかを知らん、此の如き徒輩にして、尙且基督の行ひたる奇蹟神業を認め、事實の抹却すべからざるが爲め、遂に「此人實に多くの奇蹟を行ひたり」と迄自白するに至りたるあらん、庶幾くは基督性行の光風霽月なるを見るに足らんか、眼前目撃したる當時の仇敵にして、果して此の如き自白をなしたりとせむ、二千年後の反對論者が、漫に二千年前の事實を揣摩して、疑を茲に挟まんとするが如きは、是れ豈に一大無暗の沙汰なりと謂はざるを得んや、況んや徒らに之が有無眞偽を喋々して、其の實在をも否定せんとするが如きをや。

且夫れ是等の事蹟は皆是れ眞率なる福音記者の忠實に述べ記したる所なるが故に、尙も自家利害の觀念を離れて、半夜孤燈の下、一片の誠心を以てこれを精讀するあらん、當時人民の欺かれたるや否やの如きは、身今日に在りても之を判別するに難からざらん、視よ、確固抜く可からざる事實を視よ、當時目に之を見たる者は、心に之を信じたり、又心に之を信じたる者の中には、一死以て之を實にしたる者あり、即ち彼の基督の弟子の如きは、皆是れ其目に見、耳に聞き、手に觸れたる所を證明せんが爲に、一身を鴻毛の輕さに比したる者なり、生命を賭したる者の言、果して信すべくんぞ、何んぞ此邊に留意せざる。

今又翻つて基督を神子救主と認めざる當時の仇敵を視よ、之が證據は是等仇敵の中にも歴然たり、何となれば、彼等が基督を神子救主と認めずと云ふ理由を擧げて、自身の潔白を表せんが爲に、基督の奇蹟を行ひたる力の那邊に由來したるやを解釋したるを見るに、其言牽強附會たるにあらずんぞ、往々笑止千萬なるを免れざれをなり、當時猶太の顔老の言に曰く「基督はセオワの名を同名の堂より竊取したり、彼れの不

思議を行ひたるは、皆其名の力に由る」と、嗚呼何んぞ其言の笑止なる、アレキサン  
 ドリヤ府に於ける希臘派哲學者の説に曰く「基督は嘗て其母と共に埃及に流寓せる  
 時、同國に魔術を學びたり、彼れの奇蹟を行ひたるは即ち是れ其魔術の應用に外なら  
 ず」と、嗚呼何んぞ其説の窮せるや、宜なる哉是等の猶太人に對し、哲學者に對して、  
 畢生論戰したる一大護法論士オリセヌが、快刀破竹の勢を以て、一撃の下に彼等の言  
 論を破碎し、「爾等が一世一代の知能を絞りて、基督の奇蹟に反對したるの結果、僅々  
 斯る平凡の愚説を擧ぐるに止まるか」と冷笑一番したるや、因て彼れオリセンは、此一  
 事を以ても基督の神たることを釣出して曰く、「基督は嘗つて云ふ、我は神の子なり  
 と、而して彼は此言を證せんが爲に、無算の奇蹟を行ひたり」と、見る可し、反對論  
 者の言論の中にも、基督の公明正大なる性行は、皎然日星の如く輝けるを。

嗟呼基督の神業奇蹟は、其初めて世に行はれたる當時より、業に已に幾多の反對論者  
 を有して、千攻萬擊強辨曲解せられたる事此の如くなれども、常に是等反對論者の紛  
 囂を排して、優に神の能力を發揚し來りたり、然らむ則ち、二千年後の今日に於て、

又々基督の神妙至聖なる性行を非難攻撃する者、例へんルナンの如き者出るあるも、  
 吾人は毫も奇異怪訝の念を起さず、寧ろ吾人基督教徒の信念を堅牢ならしむる道なり  
 として、満足の情なき能はず、何となれを彼れ如何に畢生の心血を茲に傾注するも、  
 畢竟古來敵敵の論難攻撃したる所を再演するに過ぎざるなり、而して基督の公明正大  
 なる性行は其論難攻撃の裡に日星炳出、萬古に皎然たり。

余は此一段に於て専ら重きを福音書に置きて論じたるが故に、茲に同書の眞實と典  
 據に就て一言するの已むる得ざるに至りぬ、然れども言少しく題外に奔るの嫌なき  
 にあらざるを以て、理論上の一大長論は暫らく之を割愛して、單に歴史的事實の上  
 より一言せんと欲す。

歴史的事實の上より觀察するに、最近世期に至る迄、福音書の眞實に就ては、一人  
 も之を疑ひたる者なし、基督と同時に生息して福音者の人と爲りを知悉したる猶太  
 人も、之を疑はず、福音者其人、若くは其最初の弟子と年代を同ふせる希臘羅馬の  
 哲學者も、亦之を疑はざりければ、爾來誰れ一人として四福音を以てマテオ、マル



コ、ルカ、マコ、ヨハンの四人の手に成りたるものにあらずと唱道したる者なし、古來國の東西に異教異端の徒屢々隱見出沒して、隨分教理の要點を觝排攻撃したる者あれども、嘗て一人福音書の實著と云ふ點に容喙したる者なきは、彼等の福音書若くは福音者を指名したること、毫も吾人今日の指名する所に異ならざりし一事を見て明なり。

セルヌは第二世紀の世に斬然頭角を現はし、太く我基督公教を攻撃したる仇怨なり、然れども彼が屢々新約聖書の條章を引證したる所と、其の之れを引證したる道を見るに、當時彼の手にしたるものは、毫も今日吾人の手にする所の者に異ならざりしを知るに足る、ボルヒール是れ亦我基督公教反對論者の一人なり(二百三十三年に生れ二百〇五年に死す)然れども彼は其攻撃したる論中に、毎々福音書の眞實を承認し置けり、マコリヤンは廢教の皇帝にして、吾人基督教徒の宿敵なり(三百六十二年に即位、三百六十六年に崩去)、然れども彼れの福音と稱して引證したるは、今日の福音と毫も異ならずして、同書の眞實の如きに至りては、全く不問に附したり、其他上下一千五百有餘年の久しき間、些少なりと

も疑團を此點に懷きたる者は、何處にもなし、然らむ則ち、今日の反對論者が、福音書の記述されたる時代を距ること殆んど二千年、又同書に記載せらるゝ事跡の行はれたる國土を隔つること千里管ならざるの地に生れ出て、根據の基もなく、證據の擧ぐべきさくして、歴史上の最も較明顯著なる事實を塗抹せんとするが如きは、恰も是れ市井無賴の兒が、徒身赤手を以て、堅牢拔く可からざる金城鐵壁に當ると一般、嗚呼亦難ひ哉。

余は尙茲に前條を繼承して、一層精確に基督の性行奇蹟の公明正大なるを證論せんとす、蓋し此の二點は今日反對論者の最も論難攻撃を試みんと欲する所なれむなり。基督の弟子(使徒を云ふ)と同時代の人民は、皆基督の性行を知りて、其奇蹟の實在を確認したることは、彼等が基督の性行奇蹟に類似の人物を描寫して、務めて時の人民を欺惑せんとしたる一事を見ても知る可し、一例を擧ぐれば、デオクレシヤン皇帝の世に當り、アレキサンドリヤ府の知事にてヒエロソレスと云ふ哲學者ありたり、嘗てマヤムとアポロンの傳を記して、福音書の基督の性行に就て語りたる如く、神變不可

思議の業を行ひたる者の如くに傳説したれども、嘗て一人其説を信じて、アポロロンを神と思惟する者なく、折角の企圖は全く畫餅に歸したり、然れども此事偶々基督と福音者との証明をなすに至りぬ、何となれを真と偽、事實と無根との間には、人民の信用上一大差別あることを明かに証したれをなり。

然れども人或は曰はん、基督の奇蹟にして果して此の如く當時の人民の記憶に存したりとせむ、何爲ぞ當時の史家は之を史上に記して以て後世に傳へざるやと、曰く先づ第一記せざる可からざる事あり、當時基督教徒の著作家の外には、史書の著述に従事したる者、極めて寥々たりし事是なり、然れども此寥々たる着作者の中にも、基督の性行に就て記載したる者全く之なきにあらず、請ふ左に數者を紹介せん。

羅甸の史家にマクロプなる者あり、基督降誕の時へロド王に殺戮せられたる無辜の嬰兒に就いて記載せり。

第三世紀にカルチデウスと云ふプラトン派の哲學者あり、教主基督降誕の曉に、東天の一方に現はれたる星に就き、記して曰く「此れ決して人民に怖るべき災禍を示す凶

兆にあらず、人類の救済と幸福の爲に降りたる者の來臨を報する瑞章なり云々。」

第二世紀の末にトラルのフレゴンなる者あり、基督死去の際、天晦み地震ひたる景狀を記して曰く「二百二回後の「オリンピヤド」の第四年に當りて「オリンピヤド」とは希臘の年歴にて、四年の時期を云ふ、第一回の「オリンピヤド」は基督生前七百七十六年に當る、古今未曾有の一大日蝕あり、正午に至りて一天暗然白晝尙星辰を認むるに及ぶ、須臾にして地大に震ひ、ピチニヤの市街ニセーに於て家屋を頽壞し、其數幾許なるを知らず云々」而して此二百二回後の「オリンピヤド」の第四年は、正しく基督降生後の三十三年に相當す。

又有名なる猶太の史家ジョセフ(基督生後三十七年に生れ同九十五年に死す)は「アンナキテ、シユダイク」と

題せる書第十八卷第四章の中に、基督のことに就き左の如く記載す、「此時に當り(ピラトの治世)耶蘇なる者あり、人と爲り賢明にして、但し人と稱するを得む、神妙不可思議の業を行ひ、好んで之を聞見し事實なりと信認する人々の師を以て自ら任ず、彼れ多くの弟子を有し、猶太の民にも外國の民にも慕慕せらる、嘗て我國の首領治者が

ピラトの前に訴へたる基督なる者は即ち此人なり、彼れ遂に宣告を受けて死刑に處せらる、然るに之に師事したる弟子等は、如何なる事にも辟易せず、永く之を愛慕し、其死の羞耻なるを見ても猶且流離散亂せざりければ、彼れ三日目の曉に蘇生して、歴然彼等に現はる、此事は領言者が天啓に感じて疾く既に先言し置きたる所、而して其他にも彼に就て先言せられたる神妙不可思議の事夥多あり、且今日に至るまで一種の民族遺存して、基督教徒と稱す、蓋し其名を彼に取りたるものなり云々。」

此れ實に猶太の史家ジョセフが基督に就て記載したる言なり、現今の不信の徒輩は、福音書の眞實に反抗の叫聲を揚げつゝあるが故に、此言をも否定してジョセフの口より發したるものにあらずと斷言す、然れども此言は同氏の古き寫本中にも記載せられ、古代の基督公教著作家の遺書中にも散見するが故に、容易に抹却する能はず、殊に教會博士聖ゼロム、及最古の教會歴史家聖ユゼフの如きは、パレスチンに於て猶太人民に對して公然此言を引證したることあり、若し夫れ此言にして果してジョセフの口より發したるものにあらずとせむ、彼の猶太人は國國擧つて之に反對の叫聲を揚げたり

しならん、就中彼の「ラッビ」と稱せられたる元老の如きは、必ず率先して之に反對したるや明かなり、而るに事茲に至らざりしを見む、此言の益々ジョセフの口より發したるを證するに足る、聖ユゼフは基督生後三百三十九年に逝去したる者なり。

以上基督教外の學者より引證したる言、固より基督の性行を證明するに於て與つて力ありと雖、基督教徒の聖賢に就て之が證據を求むるに至ては、尙幾倍の力あるを見るならん、何となれば(第一)基督教徒の聖賢にして之が證據を立てたる者は、其數基督教外の學者に比して幾百千倍なるや得て知る能はず、(第二)是等聖賢は往々皆教會創立の初代に歸誠したる者、以前には孰れも皆基督教反對の論者なり、然れども同教の眞理には到底打勝つことを得ずして、遂に割然其の眞理を認むるに至り、爾來一身の利害を顧ずして之に歸信し、百の障礙を排して之を遵奉し、一生の間之を播布し、之を擁護せんが爲に、滿腔の熱血を濺ぎたる者なればなり、而かも其中には生命を犠牲に供して同教の眞理を證明したる者、實に擧げて數ふ可からず、聖ヨヌナン、聖イレネの如き蓋し其人あり、法理學者の言に曰く「我は身を屠りて證を立つる者の言を容

易に信す」と、然らむ則ち、右聖賢の證據の如何に勢力あるかは、得て知る可きなり。其他基督在世の當時より、一死以て其性行を證明したる十二使徒に繼いで、基督を眞神と信じ、基督を標準に仰ぎ、又基督の聖教を固守普及せんが爲に、畢生の心血を注ぎ、一身の利害を棄て、自己の生命をも擲ちたる者、陸續踵を接して輩出し、其數實に幾百千萬なるを知らず、今日吾人の稱して致命と云ひ、童貞と云ひ、教會博士と云ふ者即皆是なり、今茲に是等男女聖賢を以て基督性行の神妙至聖なるを表白したる實行の活證者として、一々讀者の眼前に列擧するを得れども、言餘りに長大に失するの恐あるを以て、姑く之を略す、然り、一千八百有餘年間の教會歴史に就て觀望すべき一大聖劇として略さざるを得ず、然れども記せよ、苟も誠心正意の人ならむ、余が前條に概記せる一端を見ても、古來の預言を一身に完遂して以て神の全知を表明し、神妙不可思議の奇蹟を行て以て神の万能を發揚したる一基督の生涯は、古往今來尤も哲學的に、尤も歴史的に證明せられたる一大事實なるを推知するに足らん。

(第三點)彼は其死後に於て何事を爲したりしぞ、||基督の苦難と死去に關する歴史は、

天下萬衆の普く稔知する所、今更茲に之を贅するの必要なし、唯茲に吾人の留意すべき一事あり、何ぞや、他なし、基督の山高く水深き聖徳は、勿論其三年の生涯に於て、既に已に十分煥發したれども、其死期の目睫に迫りたる時に當ては、層一層其光輝を發したりと云ふ事はなり、吾人想ふて此に到る毎に、未だ嘗て一天萬有の上に位せる無上至尊の神が、塵寰に降生して斯の如き極難極苦を嘗むるを辭せざりしに感泣せずんむあらず、夫れ徳は榮譽幸運の順境に於て之を行ふは易し、凌辱難苦の逆境に處して之を行ふは難し、若し夫れ極難極苦の地に立ち、中心一點の疚しき所なくして、舉世の非毀を一身に受けつゝ、堅く其徳を持して動かざるに至りては、至難中の又至難と謂はざる可からず、而して基督の如きは將さに焉より大なるものあり、何となれを完全無缺一點の瑕瑾なき身、世界萬民の罪惡を双肩に擔ひ、而して其の救濟せんと欲する人民よりは虚待せられ、嘲笑せられ、罵倒せられ、打撃せられ、屠殺せられつゝ、其聖徳毫末も蝕缺せられず、寧ろ却て照然、嶺然、愈々益々嚇出傑立して、日月と其明を争ひ、泰山と其高さを比するに至りたれむなり、宜なる哉昔者ホッスエ氏が

瞑目沈思の末、「艱難と徳行の妙調和合、我れ其故を知る能はず」と叫んで感驚したるや、嗟乎實に基督受難の歴史の如きは、古今東西の歴史中、絶ゐて其比なきもの、所謂天下一あつて二なきものと謂はざる可からず、故に彼の基督教反對論者ルーソーの如きすら、泰西の古聖ソクラテスの生死と基督の生死とを比較對照して、千古の明言を吐くに至りぬ、曰く「若しソクラテスの生死にして賢聖の生死なりとせむ、基督の生死は確に神の生死なりと謂はざる可からず」と、一言能く吾人の言はんと欲する所を言ひ盡したりと謂ふ可し。

次に基督の死後に行はれたる事業に就ても、余は茲に逐一之が詳細を語るの意なし、但だ其中に一千八百有餘年前より、全地球上に磅礴して、今尙吾人の眼前に顯然たる一事あるは、吾人の輕々看過する能はざる所なるを以て、聊か茲に之を陳せんと欲す、請ひ問ふ、其一事とは何ぞ、他なし、基督の教が其教會と共に坤圓球上に成立持續せる事是なり、個は實に基督の死後に行はれたる空前絶後の一大築造なり、是れ此一大築造今日其現存する所より觀察するときは、敢て壯觀の驚くべきなきが如しと雖、遠

く創立の當初に遡りて、其如何に建立せられ、如何なる基礎の上に屹立せられたるやを追想するに至ては、實に玄妙不可思議の一大奇蹟と謂はざるべからざるものなり、眼前に現るゝ所のみを以てするも、基督の人と爲り如何と、又其事業如何を考へなむ、蓋し思ひ半むに過ん、夫れ悉々たる人衆の中に於ては、基督も亦是れ尋常一様の人間、而かも才學なく、名聲なく、信用なく、威望なく、扶助なく、如何なる聲價もなき者、實に微々たる一小邑の平凡なる一工匠、國に在りては音もなく聞ゆるもなく、民よりは平素太く蔑視せられ、生れて三十年、其生活實に此の如し、嘗て學校に入りたることなれけむ、一の師に就て學びたることもなし、而して自からは天下万民を教へんことを企圖したり、其弟子に至りても、又彼に異らず、否彼よりは尙一層惘然たる者、又一層微々たる者にして、其言動は徒らに師の企事の成る能はざるを示して、天下の笑を招くの具たるに過ぎざりき、彼れ三十三歳の曉に至り、國教の權には起訴せられ、國政の權には處罰せられ、其羞辱の極まる處、遂に往來の大道、盜賊二人の中央、磔架に釘せられて、大逆無道の酷罰、皂隸奴僕の醜刑を以て、其一命を終りたり、此時

に當り其弟子の一人を除くの外、皆彼を放棄して、四もに離散し、宛然牧者捕に就きて群羊散亂の觀を呈したり、而して彼れ遂に死して、其屍石棺に投せらる、棺を蓋ふて後は、寂然として其片影も世に留存せず、然るに彼が己の企業を繼行せしめん爲に撰抜したる弟子は、彼れの死して世に音なき時に、再び相集まりて、從來の愚狂に似もやらず、眞理を世界の萬民に教へて、迷信を東西到る處に攪破し、古今の哲學鴻儒の誤謬を正して、王民上下の罪惡を矯匡せんことを協議しぬ、嗚呼夫れ文教燦然たる希臘當時の學者をして之を見せしめむ、果して如何ぞや、彼等は此惘然たる弟子の集合を見、其師の抱懷したる大企圖を聞き、焉んぞ憤飯、否、憫笑せざるを得んや、而して世界の全面を一新する一大企業を計畫したる弟子の人と爲り如何を顧みるときは、又實に人をして轉た憫憐の情に堪へざらしむるものありたり、看よ、彼の弟子何人ぞ、カリレーの十一漁夫のみ、チペリアド湖畔の舟子のみ、教育もなく、學識もなく、財産もなく、恐らく心又蔽れたる襤褸の外、一枚の衣をも所持せざりしならん、文筆を能くせる者に至りては、稅吏一人ありしのみ、嗟乎此の如き愚民が、地球上の面目を革新

せんが爲に、世界の南北東西に舞り出でたりとせむ、殊に天真爛漫の身を以て、覇權宇内を統一せるローマ大都に入り、學藝の淵藪を聞かたるアテナ城中に臻りて、堂々たる翰林學院に入りたらんには、果して如何なる言論起り、果して如何なる問答ありたりとするや、今より追想せむ、其問答蓋し左の如けん。

學者先づ問はん「爾等何處より來れる」、彼等答ふ「寥々として世に響なき一小微國のシュデー、而かも同國人民にも殊更ら蔑如せられつゝあるガリレーよりす」、  
 「爾等の職掌如何」、  
 「漁業を以て職とす、才學の如き、知職の如き、名望の如き、威信の如き、固より之あるなし」、  
 「何の爲めに來れる」、  
 「希臘羅馬の人士に教へ、學者の迷妄を正し、國都の風俗を革め、延いて全世界の局面を一新せんが爲に」、  
 「斯の如き一大事業を企てんと欲せむ、必ず學びたる所あらん、何處の如何なる學校に學びたる」、  
 「生れてより未だ嘗つて學校に通學したることなし、我々の師事したる者は、我國の一工匠なり、我々は之と俱に猶太の大都小邑を巡歴すること殆んど三年、其間往々河海に漁して生を送り、時に或は市に出で、食を乞ひたることもあり」、  
 「其

工匠とは如何なる人ぞ」「同國の民より國家の安寧秩序を紊亂せり」とて告訴せられ、ナヘル皇帝の御代に當り、羅馬の知事ピラトなる者の宣告により、盜賊二人の間に磔刑に處せられたる者なり、「然らむ則ち爾等が此の一奇人の師に就て學びたる所如何」「我々の學びたる所は、玄妙不可思議にして人間の知能の得て測る可からざる教理、純白潔精にして人間の情欲と氷炭相容れざる倫道、且今日迄世界の人民に遵奉せられたる東西各種の宗教を打破して、根本より之を改革せんと欲する教法是なり、此教法の旨趣は我々の師即ち彼の磔刑に處せられたる工匠其者を以て、獨一無二の眞神として信奉し、天下億兆の救主として尊拜し、之に依らずんば人其救靈の大道を得る能はずと教ゆるに在り云々。」

嗚呼基督の弟子の斯の如き奇答怪應を聞見したる學者は、果して如何なる感情を以て之を遇すべかりしや、其言に憫笑を以て之を蔑如するのみならず、又必ず憤懣を以て之を窘逐したるや、照々乎として明かなり、若夫れ僧侶一味の輩をして斯の如き大膽不敵、無禮暴慢の企圖を見せしめむ、必ず憤然として起り、邦家の爲め（實は一身の

利害の爲め）由々しき一大事なりとて、率先之に反對して無知の人民を煽動せしならん、又彼の哲學者の如きも、初めには白眼冷笑を以て之を遇するも、其夷狄の小人視したる徒輩の爲に、自家の誤妄謬戾を指摘せらるゝを見るに至ては、安んぞ憤慨して以て咄々一大怪事を叫ぶざるを得んや、次に又從來天下の萬機を握りて、萬事專制的に統馭せる治者の如きも、自己の上に獨一無二の神ありて宇内を主宰せるを聞かむ、焉んぞ黙々として之を放棄し置かんや、嗚呼是れ實に彼のガリレー工匠の弟子及其信徒が、三百年の久しき、僧侶の憤怨、人民の情欲、學者の倨傲、治者の權柄の爲に、言ふに忍びざる虚待酷遇を受けたる所以なりとす、當時此れが爲に吾教の信徒にして、老幼男女の殺戮せられる者、其數幾百千萬なるを知らず、一時は羅馬の大都小邑到處伏屍積んで山を成し、鮮血流れて川を爲すの慘狀を呈するに至りぬ、流石の大國も犠牲餘つて、刑吏手疲れたりと云へむ、以て其一斑を知る可し、然るに斯の如き腥風陰雨に満たされたる一大悲劇は、終に如何なる閉幕を以て其局を結ぶに至りたるやと云ふに、彼の最後の迫害者が、基督教徒を掃蕩したりと信じて、此の大業を己の功に

歸せんが爲め、「基督の名聲消盡云々」の一大標柱を立てたる當時に於ても、ガリレ一の漁夫の教は、滔々一瀉千里の勢を以て、羅馬帝國の都邑を滿たし、下は閭巷茅屋の細民より、上は金殿玉樓に住まはるゝ御一人をも歸信せしむるに至りて、遂に十字架の狂愚は、最後の勝利となりて、滿天下を風靡することとはなりぬ、是に於て乎ナザレットの工匠も、コンスタンチン大帝の拜する所となりて、巍々たる殿堂國の要衝に屹立するに至る、是に於て乎古代の迷信も、國民の腦髓を脱して、雲散霧消忽ち其跡を絶つに至る、古來哲學者の卑下したる無知の人民も、茲に哲學の大道に通曉するに及び、一代に大言壯語したる哲學者も、其謬戾漸を逐ふて匡正せらるゝに及び、終には道義の尤も頹亂し、風俗の尤も腐敗せる地も、ナザレットの一工匠の信徒の充滿せるが爲に、致命の鮮血に洗滌せられて、世の未だ嘗て夢想することも得ざる盛徳偉業の燦爛たるを見るに至りぬ。

是故に若し今日の學者にして、耶蘇基督と其教の宣傳に従事する教徒を見て、往昔希臘羅馬の學者がナザレットの工匠とガリレ一の漁夫を目したるが如き感をなし、坐る

に憫笑輕侮の念を起すものあらむ、請ふ大早計に之が判断を下さずして、沈思熟慮の上、徐ろに其の然る所以を攻究せられんことを、何となれを其狂愚卑賤と見ゆるは、却て是れ我基督公教の神立の教なることを表明する争ふ可からざる證據にして、決して憫笑輕侮すべきものにあらざれむなり、我基督公教の創立者と之が弘布の方法が、世人の目に愈々狂愚卑賤に見らるゝときは、同教の世界萬民より信奉せらるゝ事實は、愈々解釋に苦む所となるべし、夫れ我基督公教の世界萬民に信奉せられつゝあることは、天下公衆の普く知る所、而して此に到りたるは、毫も人性的の方法手段に由らず、寧ろ世の有らゆる攻撃、暴力、障害等を排して成立したることは、是又歴史上打消す能はざる事實にして、今尙吾人の眼前に行はれつゝあるものなり、抑々此の争ふ可からざる超性的事實は、何に由りて來れるか、是れ實に同教を以て神立の教とせざれむ、到底解釋し得ざる問題なり、昔者オリセン、オクスナンの二賢聖、既に此問題を時の哲學者に提起して曰く、基督公教の創設は奇蹟の力に由りたる耶、將た由らざる耶、若し奇蹟の力に由りて創設せられたりとせむ、基督公教は神立の教にして、其世に傳



播したることは冥々裡の神業、超性的の結果なる事、嗚々を待たずして瞭かなり、若し又奇蹟の力に由らずして創設せられたりとせんか、此を以ても一大奇蹟あるを承認するにあらざれど、一大不合理の議論に陥らざる可からず、一大奇蹟あるを承認すとは何ぞや、他無し、基督公教の如き狂愚卑賤の開祖徒弟に創立宣傳せられたるものにして、毫も奇蹟の力なく全地球上の萬民に信奉せらるゝに至りたることは、是れぞ實に奇蹟中の最大奇蹟なれどなり、一大不合理の議論に陥らざる可からずとは何ぞ、他なし、原因なきの結果は天下有る可き理なきこと、人の皆知了する所、而るに基督公教と云ふものが、世界の道德界を一變して、一大新局面を開き、原由する所もなく、偶然に、而かも世の千難萬艱に打勝つて、實際に大功を奏するに至りたれどなり、嗚呼此大議論は、彼の偉大なる賢聖オリセン、オグステンの二氏を始めとし、其他幾多の吾教博士より時の哲學者、辯論家に質されたる所なり、然るに是等學者は磔刑に處せられたるナザレットの一工匠が、如何にして世界萬民より唯一の眞神と尊拜せらるゝに至りたるか、又其工匠の教が如何にして東西古今の聖賢の燈火と仰がるゝに至りたるかを解釋するを得ずして、皆口を箝し舌を卷て默然たりき、適々之を解釋せんと試みたる者あれど、徒らに強辨曲解を逞ふして喋々したるに過ぎず、到底人をも己をも満足せしむること能はざりき、敢て問ふ、今日の基督教反對の自稱學者は、能く此問題を解釋し得るか、大膽にも神學即ち我基督公教の聖學を以て、一種の偽學とまで斷言する以上は、必ず先づ此問題を解釋するの明なかる可からず、而して此問題を解釋するには、必ず先づ神學の基く所の根據、即ち基督及其弟子の歴史、並に其教の地球上に創立せられて、今日まで盛んに持續し來れる事實を否定して、無稽の談、偶然の結果なりと證明するの力なかる可からず、敢て問ふ、此明、此力あるか、徒らに瑣々たる一國一時の出來事を喋々せる學者は、斯の如く世界萬國到る處に行はれつゝある一大事實に抗せんとするは、螻螂の臂を怒らして車轍に當るに類せずとせんや、且や時機既に遅れたり、二千年後の學者にして、二千年前の事を論せんとするは、嗚呼の至りなり、土地又餘りに懸絶せり、山海萬里の絶島に生れて、山海萬里の國に行はれたる事を論難することは、片腹痛し、笑止の極なり、憫然の至りなり、斯の如き事蹟を論難攻撃

することは、基督其及弟子と同地同代の學者の爲すべかりし事業なりき、何となれを身基督及其弟子と同天地同時代に棲息し、足其事蹟の行はれたる土地を蹈み、目に基督及其弟子の人と爲り如何を見るときは、是等の事蹟の眞偽を攻究すること、極めて易々たれをなり、殊に當時基督に反對したる仇敵は、今日の反對論者よりは一層奇矯激烈なりし事實もあれを、愈々以て其言論に信を置く可けれをなり、是等の點に就ては、今日の基督教反對論者は大だ誤れり、彼等は基督に就き一難問其念頭に浮び出る毎に、初めて之を發見したるが如く自負す、憫むべきなり、彼等の此點に於ける言動は、宛かも哲學幼年生の如き觀なくんをわらず、己の腦髓を以て漸く一事を案出するに至れを、即ち以爲らく是れ余の案出なり、余の前未だ嘗て此言わらずと、然れども後日古人の遺書を繕くに及び、嘗つて自家腦中の案出となしたる思想が、一層高尚に而かも一層の名文を以て記載せられあるを見るときは、初めて己の誤を曉りて、自己の才學に誇れる心を挫屈するに至るなり、今日の基督教反對論者が我基督教に對する言動は、正しく此の如きものなり、彼等にして若し意あらむ、余は欣んで一千五六百年前

の作に係る古賢の大卷を示さん、彼等若し之を繕て讀むの力あらむ、此大遺書に因りて大に發明するところあらん、何をか發明すべき、曰く(第一)古の學者は才學高遠、經術深湛にして、今の學者の到底企及すべからざる事、(第二)基督教の聖賢が時の學者に答辯したる議論は、今の學者をして再び同教を攻撃せんと欲する勇を失はしむる事、(第三)才學高遠、經術深湛なる古賢が、滿腔の熱血を濺いで、一生我基督教を舐排したるも、同教は巍然動かざること泰山の如く、皎然明かなること日月の如くなりしとせむ、今日の自稱學者が徒らに古人の糟粕を嘗て、再び螻蛄の斧を揮はんとするも、吾教の眞理に取りては蚊蚋置ならざる事、(第五)隨て古來斯の如き歴史を帯び來りたる我基督教の聖學を以て、大膽にも一種の僞學なりと斷するが如きは、適々以て己の狂愚を天下に發表する事。

若し夫れ神學を以て一種の迷信より出づる僞學なりと斷するに至りては、狂愚も又極まれりと謂ふ可し、請ふ余をして其狂愚を表白せしめよ、迷信とは何ぞ、合理的の緣由なき信念慣行是なり、然らむ神學には果して此の如き信念慣行の形影之あるか、嗚

呼今日の自稱哲學者よ、若し意あらむ、若し力あらむ、我基督教の神學を徹始徹終殘る限なく通讀討究せよ、萬々一にも合理的の證據に基かざる所あらむ、一字一句なりども之を指摘し舉げよ、能はずんを漫に妄言を吐く勿れ、夫れ人已の未だ知らざる事に就て語らんと欲するや、必ず先づ其語らんと欲する前に、其事の何たるを知了せざる可からず、是れ實に哲學初步の一原義なり、若し余の親愛すべき今日の自稱哲學者にして、否、幼年哲學生にして、此原義を忘却せずとせむ、何ぞ必ずしも斯の如き無責任の言論を爲さんや、抑々事の實際に於て其神學の因つて起れりと云ふ一種の迷信なるもの、即ち道理的の根據なき信念なるものは、何人より我基督教の聖學に輸入せられたるか、又如何にして今日迄持續し來りたるものなるにや、彼れ幼年哲學生果して之を言ひ得るや、彼の猶太人よりすと言はんか、彼等は我基督教の開祖を磔刑に處したる者、爾來二千年後の今日に至る迄、所在に其教徒を嫉怨憎惡して窘迫しつゝある者なるを知らざるか、然らむ羅馬帝國の帝王なり、有司なり、僧侶一味の輩なりと言はんか、彼等は當初三百年の間權柄を弄し、愛國を口にして、我基督教徒を屠殺し、

以て基督教徒と云ふ稱名をも消滅に歸せしめんとしたる者なるを知らざるか、然らむ則ち同教創立の當時の哲學者なりと言はんか、彼等は學生の力を揮ふて同教に反對し、其一生の事業とする所は、我基督教を論難し、批評し、打撃するに在りて、能ふ可くんを同教の教理を細大遺さず漏さず粉塵して、片々断々にせんことを期したる者なるを知らざるか、若又基督及其弟子の口より出でたる儘なる教義其物に於て、既に迷信の形跡之ありとせむ、今日迄何處に潜伏してありたるぞ、如何にして斯く迄苛探酷求せる古の學者の眼に觸れざりしぞ、抑々又古の學者は之を發見して天下に發表する榮を今日の學者に譲りたるか、謂ふを止めよ、實際の歴史は明かに之が反對を證す、視よ、今日我基督教の傳播する所は、東西如何なる國に於ても、眞理の許さざる信念慣行、所謂迷信なるものを雲消霞散し來りて、吾人をして「日光の輝く處些の暗點を見ず、公教の到る處迷信跡を絶つ」と公言憚るなからしむるにあらずや、是れ此事實冀くは迷信と我基督教の聖學との間に、一大區別あることを幼年の哲學生に示教するに足らんか。

人或は人性的の神を以て空想迷信に出るとなし、神にして人と成るが如きは、天下有る可き理なしと論ずる者あり、然れども是れ畢竟するに、至仁至慈なる神が吾人々類を愛憐するの深き、畏れ多くも尊體を棄して人間に降生し、其極天下萬民の爲に聖身を犠牲に供するに至りたるを解釋する能はざるに職由す、然り、此の如く天恩の山高く海深き御所爲は、平素優渥なる神の仁愛に感泣しつゝある我基督教徒と雖、窺ひ知る能はざる所なりとす、されど吾教にても古來基督救世の一大事業の如きは、倒底人知の得て知る能はざる所となしぬ、使徒聖保祿の如き者すらも、無上の神が罪深き人間を愛する一片の心を以て、羞至り耻極れる磔刑に就きたる仁恩を語るに當り、適言切語の之なきを以て、已むを得ず「十字架の愚」と云ふ硬直なる奇語を用ゆるに至れり、然りと雖、此仁愛深き事業は、人の窺知する能はざる所なるが故に、無上至尊の神に適合せざる事なりと謂ふ可からず、却て吾教の哲學者即ち神學者なる者は(彼と此とは名異に實同じ)、此事人の窺知する能はざる所なるが故に、益々以て無上至尊の神業と爲すに足ると論ず、其故は何ぞや、神に於ては物皆無限なり、其能力も限りなければ、

其仁愛も亦限りなし、故に其能力仁愛の發して宇宙萬物の上に現はるゝや、全然無限の事業を以てするは、實際能はざる所なりとするも、實ては幾分無限の意を寓する事業を以てせざる可からず、否らざれば限りなき神の事業と爲すに足らざればなり、然り而して神は先きに此世界を創造するに當り、「有れ」の一言を以て、森羅の萬物を無何有の郷より燦然顯出せしめて、既に其能力の限りなきを發表しぬ、然らば則ち其後に至りて、其仁愛の限りなきを發表せんが爲には、宜しく如何して可なる、須らく一天萬有の上に位する身塵寰に降來して、嚴冬中夜既に誕生し、三十三年艱險備さに嘗め、寶血を磔上に流して、聖身石棺に葬らるゝの事あるべかりしなり、而して此事神の人と爲りたるときには行はれぬ、嗚呼造主にして被造の動物の爲、恩主にして忘恩の人間の爲事茲に出でたるを見て、誰か其仁至り愛極まれる天恩の優渥なるに感涙を潑かざるものあらんや、這般の仁愛は固より人間の思想心情の上に超出す、然れども其人間の思想心情の上に超出する所以は、即ち是れ仁愛限りなき神の美舉とするに足る所以なり、此舉眞誠の哲學的眼孔ある學者には、道德界精神界の二界に於て尤も高尚

にして、又尤も顯赫なるものと感銘せらるゝに引き換へて、知能狹小なる井蛙的學者には、空想の極、迷信の至りと見做さるゝは、蓋し其見の未だ到らざるあるが爲なりと知らる、故に若し哲學者と稱せらるゝ者にして、斯の如き教義を非難して、迷信より出でたるが如く論ずるものあらざらば、是れ全く此教義の何たるを知悉せざるに坐するが爲なりと謂はざる可からず、是を以て吾人は切に希望す、若し我基督公教を論難攻撃せんと欲せば、須らく先づ我基督公教の何物たるを講究知了せん事を、又若し講究の上一片の良心に眞理なりと思はば、敢て進んで之を信奉するを憚るなからんことを、之を信奉するは決して迷信社會に入るにあらず、却て是れ誠高く徳邵き聖賢の列に加はることなるを記せよ。

#### 加特力教者たると哲學者科學者たるとの関係

論者曰く、基督教信者にして方今卓絶せる哲學者科學者は果して幾人かある云々と、即ち是れ基督教信者たるときは、卓絶せる哲學者科學者たるを得ずと云ふ筆法なり。

吾人は之に反して我基督公教は、其單純なる教義に於て、眞誠なる哲學を含蓄するを聞く、未だ基督教外の哲學者の紛々藉々たる論中に、之あるを聞かざるなり、惟ふに古來幾多の賢哲が、哲學者たるよりは、寧ろ基督教信徒たるを貴重視したるもの、蓋し亦是れが爲ならん、彼等は皆自身光榮の存する所は、學問にあるよりは、寧ろ信仰にありと思惟したるが故に、基督教徒たる事は、彼等の見て以て無上の名譽となしたる所なり、記せよ吾人の所謂賢哲なるものは、決して近代の科學に功勞なき人物にはあらざること、近代科學の原理的發明者とも稱すべき者は、正しく皆此大人物にてありぬ、方今の所謂哲學者、科學者として一部の短見者流に稱揚せらるゝ者は、たゞ此大人物の原理的發明に潛みたる所のものを若くは詳細に推理し、若くは實際に應用したるに過ぎざるのみ、然らば吾人の所謂大人物とは誰とかならず、曰くバスケル、曰くニュウトン、曰くケプラー、曰くライブニッツ、曰くボスニ、曰くコペルニク等、其他天下後世より哲學の泰斗、科學の鼻祖と稱せらるゝ碩學鴻儒を指して謂ふなり、是等の大人物は孰れも皆、學理上の知識よりは、宗教上の信仰を層一層尊貴したるもの

なり、是れ亦以なきにあらず、彼等は自己の知識の力よりは、寧ろ眞誠なる宗教の恵によりて發見したる眞理の多きを知れむなり、就中ニュートンの如きは、眞理の光りを發揮するには宗教上の信仰最も與つて力あるを知了したるが故に、造物主の名を耳にする毎に、未だ會て帽を脱して深く尊敬を表せざるはなかりしと云ふ、然らむ則ち基督教徒と哲學者とは密接の關係ありて、眞誠の哲學なるものは、渾て皆其本源を基督公教に取れるものと謂ふべし。

然りと雖此に區別を立て、論すべき事あり、抑々最近三十年間の歐洲諸國には、學者社會に於て、學問二派に岐れ、二派各々其趣を異にするのみならず、全然相反して、水火管ならざるの趣あり、試みに現時歐洲の學者社會を看よ、一方に於て無形なる一神靈の存在を認定する者あれむ、他の一方には全然之を否定する者もあり、一方に於て人に永遠不滅なる無形の靈性の在るあるを確信する者あれむ、他の一方には物体の外、物の在るべき理なしと主張する者あり、道德の如き、政治の如き、亦皆然り、或者は道德の基礎を以て善惡正邪の識別にありとすれむ、或者は之に反して單に利己利益の上

にありとなし、或者は政治を解釋して、自由と良心とを備具せる道義的臣民を、正義によりて治むる方術なりとすれむ、或者は其反對の位地に立ちて、動物的人間を一國の境内に於て、安らかに牧する業務の如く見做す者ありて、甲論乙駁、彼認此否、紛々籍々として孰れか是、孰れか非なるを知る能はざらしむるは、是れ實に歐洲現今の自稱學者社會の現状なり。

それ學問の原理とも稱すべきものに就て、此の如く所見を異にせる自稱學者社會を一見し、而かも往々無神論者唯物論者等の中のみを索めて、基督教徒中には卓絶せる哲學者科學者なしと云ふ、宜なる哉其之なきや、何となれむ反對なる學者を反對なる學者の中に就て求むれむなり、知らずや我基督公教の眞髓は、無神唯物の説と全く相反して、無始無終の神靈の存在と、永遠不滅なる靈性の存在とを以て、萬學の由つて出る本源となすに在るを。

若し夫れ基督教徒の中に就て、之が哲學者科學者を求めんか、教外の哲學者科學者中尤も顯然たる者と比肩して遜色なき者、實に屈指に堪へざるなり、人若し之を知らん

と欲せむ、須らく反對の位地に立てたる無神論者の著書を読讀せよ、若くは其學校を訪問せよ、幸にして我基督公教徒の中には、反對論者なる學者それ自身と雖、其名其學を聞て肅然尊重する哲學者科學者は、現世紀の天地にも巋然躡を接して出でたり、視よ、物理學者にはセッキ氏あり、科學者にはシュウールズ氏あり、天文學者にはルウェリエ氏あり、地質學にはラパラン氏あり、醫學者にはバーストール氏あり、語者者にはルヒール氏あり、其他ウヰグルー氏の古物學に於ける、コッマン氏の社會學に於ける、又近代の教皇レオ第十三世陛下の哲學政治に於ける、皆是れ現今の學者社會に一頭を拔きたる大人物なり、而して是れ皆孰れも我基督公教信徒たることは普く人の知る所なり、無神唯物論者が是等基督教的の大人物を引證せざるは、自ら知らざるが爲にはあらず、人に知せたくなきが爲なり、彼等同臭一味の輩は、基督教的の大人物が往々己等と其所見を異にするを見、冥々裡に陰險なる手段を施して、顯然たる其名を埋没せんと欲するものなり、其手段の卑劣なる太甚しと謂ふ可し、然れども我基督教的の學者も、亦敢て彼等の名を擧ぐるを欲せず、若し其名を擧ぐるあらむ、彼等の妄想空論

を駁して、彼等を愧死せしむる場合に限るならん、是れ實に我基督教的の大人物の學識彼等に優るあるも劣る所なきを以ての故なり。

今又退いて之が理を考ふるに、基督教徒たるが故に學識淺少なりと云ふ理由は、萬々之なしと思惟せらる、試みに看よ、誰か基督教徒は天地の造主唯一の眞神を拜するが故に、天の運行を觀、地の組織を察し、及其兩間に散在せる諸物体の特性を研究するに適せずと云ふを得るや、畢竟するに學問とは其れ果して何ぞや、有ると有らゆる事物を格知するの謂にあらずや、然らむ則ち、宇宙萬物を知らんと欲するに、宇宙萬物の大元主とも稱すべき緊要必須の一物を若くは輕々に看過し、若しくは冷然蔑視して顧みざる者、果して是れ眞誠の學問を有すと謂ふを得べきや、又人間の何物たるを究めんと欲するに、人間の生命、行爲、命運等所謂「人間の總て」が係はる所の靈性を冷笑し、放棄し、否定する者、果して是れ眞誠の學問ある者と謂ふを得べきや。

然りと雖、此の如き暗易き道理は敢て余の喋々する迄もなきことなれど、一言以て茲に此論の終局を結むんと欲す、曰く我基督教徒と無神唯物論者とは、水炭相容れざる

者なるを以て、基督教徒たる哲學者科學者の無神論者唯物論者の間に見受けられざるは、固より其分なり、然れども人知學識の點に至りて、基督教徒たると哲學者科學者たるとの兩々相併立す可からざるの理は、吾人の得て知る能はざる所なり。

### 歐洲諸國に於ても加特力教を嘲笑攻撃する者ある理由

論者曰く、歐米諸國にも基督教を嘲笑する者多し(第一)中には基督教は既に陣腐に屬せりと唱道し、其中にも基督教は仇敵なりと公言し、萬事を賭して之を殲滅に歸せんと欲する者少からず云々(第二)。

(第一)歐米諸國に於て耶蘇教を嘲笑する者多しと云ふも、我基督教に於て何かあらん、歐米諸國の民舉つて、嘲笑者の位地に立つも、我基督教の神聖は依然神聖、真理は依然真理なり、請ふ看よ、濫亂の徒にして誰か道德を嘲笑せざる者ある、放逸の子弟にして誰か教師の訓誡を冷笑せざる者ある、然れども爲に道德は不可、教師の訓誡は不當なりと謂ふを得べきか、否々嘲笑は道德訓誡の性質を變更するものにあらず、之が嘲笑者千萬あるも、道德は道德、訓誡は訓誡なり、嘲笑の有無に由りて、道德訓

誡を是非するが如きは、兒童の見のみ、我基督教を論ずるに亦此の如き筆法を以てす、是又兒童の見たるを免れざるなり。

今日歐米諸國に於て我基督教を嘲笑する者如何に過多なりと云ふと雖、恐くは昔時無神論者の巨魁なるウァルテールの如く甚しき者はなからん、而して此無神論者の巨魁の明言したる所を知るや知らずや、彼れ其一味の朋輩と共に我基督教の有らゆる事を嘲笑冷罵したる後、徐ろに其朋輩に語つて曰く「然れども此言を我が庖人に知らしむる勿れ、若し此動物にして神を信せざらんか、我は恐る或は其毒害する所とならんことを」と、嗚呼罪惡天地に容れられざる者と雖、自己の利害生死に關する時は、往々真理を白狀す、彼れウァルテールは我基督教の大敵なり、無神の説を主唱して、基督教の教を罵倒したる、孰れか之れより甚しき者あらん、然るに猶且此の言を爲す、嗚呼神を信するときは、我れも人も安全となる、ウァルテール自身既に之を證しぬ。

我基督教を嘲笑する者幾百千萬あるも、吾人は我基督教の爲に毫も憂慮せず、たゞ嘲笑者其人の爲に悲まざるを得ず、何ぞや、嘲笑は適々以て吾教の神聖を發揮して、



嘲笑者それ自らを禍すれとなり、己れの罪惡を表自せんと欲する者は、それ吾教を嘲笑せよ、それ吾教を嘲笑せよ。

(第二)歐洲の天地に於て我基督公教の仇敵の生出せる、亦何んぞ怪むに足らん、人若し我基督公教の教ゆる所に留意せむ、其理由蓋し一目の下に瞭然たらん、我基督公教の教ゆる所如何、曰く眞理、曰く道義、即ち是れ一部の人民、否、人民の大半が厄介視して省かんとする所のものなり、吾教實に之が疾呼者となり、唱道者となりて、飽まで之を人民に教へんとす、宜なる哉其陣腐を以て攻撃せられ、仇敵を以て虐待せらるゝや、古來曲論僞説の敗徳汚行と合同一致して、我基督公教に抗する所以のものは、偏に是れ同教が眞理道義の宣教師を以て世に立つに在るなり。

然りと雖、人若し歐洲曉季の今日、我基督公教を非難攻撃する者、日に月に激甚を加ふる所以を知らんと欲せむ、須らく先づ最近三十年來歐洲社會を支配しつゝある者に着眼注目せよ、知らずや三十年以來歐洲社會を支配つゝある者は、國の帝王にもあらず、大臣宰相にもあらず、皆是れ猶太人と秘密結社黨の二怪物なるを、此怪物の直

接の目的とする所は何ぞ、他にあらず、千態萬狀の假面を被り、種々様々の口實を設け、有ると有らざる手段を盡して、社會万般の事物に立入り、以て到る處に我基督公教を迫害するに在り、別言せむ、三十年來の歐洲政略は、永く持久を期し、巧に詭計を施して、歐洲諸國の忠良なる人民を非基督教化するに働きたつゝあるなり、試みに歐洲今日の政治社會を見よ、同社會の一舉一動、皆秘密結社の指令によりて左右せられざるはなし、一國の元首とも稱せらるべき帝王それ自身と雖、又之を如何ともする能はず、甚しきに至りては、帝王其人の廢立の如きも、又同結社の意嚮に係るあり、内閣大臣の如き、樞密議員の如き、固より皆同結社の黨員たらざるはなし、公使の如きに至りても、亦皆然り、良し同結社の黨員たらざる者ありとするも、同結社の指令に奴隸的の服従をなさざる者はなし、何となれど同結社先づ其意見方針を一定して之を提出するに當り、人之が實行を誓約せざるべきは、其人撰立せらるゝを得ざる事となり居れむなり、縣知事諸官吏より區長戸長の撰立に至る迄、皆此の如くなるはなし、今又眼を轉じて教育部内を看よ、亦皆事秘密結社の指令に由らざるはなし、上は大學校

より下小學校に至るまで、凡そ官立に係る諸學校に用ゆる教科書の如きは、悉く皆同結社の檢定裁可する所のものにして、校中教ゆる所の學も、亦皆同結社の奇怪なる主義による、奇怪なる主義とは何ぞ、他なし、無神唯物の主義にして、我基督公教の教理と道德には正反對のものなり、而して彼等奸知に長けたる黨與は、是等の事を成す極めて巧なり、其表面上に顯はるゝ事のみにては、一見容易に知る能はず、然れども其裏面の内情を探ぐるに至りては、實に恐るべきものあり、何となれを彼等は變幻萬狀の機略權變を以て、巧に、除るに、漸を期して、未來の社會を形成する青年子弟を毒し、異日歐洲全社會をして敗徳汚行の醜社會たらしめんとするにわれをなり、たゞそれ彼等の之を企つる、務めて人民の良心の激動を起さざらんことに留意す、故を以て人容易に之を知る能はず、(以上吾人の摘發描寫せる所は、成るべく筆鋒を和らげて、實際の半心にも達せざらしめたるが故に、歐洲の諸國一般に適應すれども、就中佛蘭西の國に適切なりとす、嗚呼此國は昔時有名の基督公教國、今や秘密結黨の蹂躪する所となり、漸く無神唯物論の暗雲黒霧に鎖されんとす、慨して慄すべきなり)、斯く我基督

公教の撲滅を企圖せる怪物の外に、不信不徳にして、猶太人の所有となり、秘密結社の買奴となる無数の新聞記者、魔怪の文筆を弄し、卑猥汚醜の人情を描寫して、醜怪の生活をなせる小説家戯曲者、淫亂放逸、惡書を嗜み、妖窟を訪ふて、日夕酒色に耽溺せる放蕩無賴漢、氣力もなく、定見もなく、世説の風中に千轉萬化せる浮佻輕薄兒、其他現任の官位を去るを欲せざるが爲、若くは垂涎せる爵秩を求めんが爲、故さら不信の狀を裝へる官吏野望家、(三十年來の經歷によりて基督教徒たるときは容易に仕官するを得ざるが故なり)、誠實に基督教を遵奉するも、言語を以て、行爲を以て自己の信仰を發表するの氣力なき柔弱無骨の信徒等、一々數へ來るときは、是れ日も足らざらんとす、而して是等の徒輩は孰れも皆我基督公教を以て陣腐なり、仇敵なりと公言唱道する者、若くは公言唱道せしむる媒妁となる者なり、嗚呼記して茲に到れむ、歐洲今日の社會には、我基督公教を敵視して、陰に、陽に、直接に、間接に之を衰滅に歸せしめんとする者は、其數實に夥多なりと謂ふ可し、然れども其員數の多きは、我基督公教に取りて何かあらん、蓋し其心情の拙きこと一々分明なれをなり、それ我基

督公教の單純なる誠命、即ち「人を殺す勿れ、偷盜する勿れ、邪淫を犯す勿れ、偽の證據をなす勿れ」と云ふ誠命の光を以て、彼等公私の生涯を照すときは、不義不徳、敗亂汚行等、一目の下に瞭然たるを以て、見る者不覺歐洲社會の醜怪を絶叫するに至る、醜例遠からず、先年のパナマ事件に在り、是れ即ち我基督公教を窘逐せる徒輩の曝露したる事件にして、忽ち醜名を海外に轟かし、今や一人の之を知らざる者なきに至る、不幸にして此事扶桑の美國まで響きぬ、惟ふに斯る醜絶怪絶の惡事は、日本の臣民の想像にだも觀望する能はざる所ならん、嗚呼歐洲第一の文明國と稱せらるゝ者にして、人心の腐敗し、道德の紊亂せること夫れ斯の如し、誰か言ふ文明日進の國なりと、文明日進はたいそれ外觀のみ、吾教の燈火を以て其内部を照せし、怪物充滿、暗鬼縱横す、是れ此怪物は廉耻の何物たるを知らざる公然の大盜にして、往々國家顯要の位地を占めたる者、今尙は占めつゝある者なれど、奇怪なるは一人を除くの外、悉く皆猶太人、若くは秘密結社の黨與たらざるなきこと是なり、然らば則ち吾人基督公教徒は、歐洲の社會に吾教を非難し、攻撃し、降魔呼ぶりし、仇敵視する者あるを見て、一見

其數の夥しきに喫驚すると雖、燭を執つて近く非難攻撃者の何者なるを熟視するときは、却りて吾人の満足慰安する所なり、何となれを數と力とは彼に存すれども、義と眞とは我に存すれをなり。

今を距る二百年前、佛國の道德家ラブルエル氏云へるあり、曰く「盜賊にもあらず、殺人にもあらず、偽言者にもあらず、破誓漢にもあらず、淫亂家にもあらずして、基督公教を非難攻撃する者之あらむ、其の言ふ所、是れ實に詳察するに價するなり、斯くまで人は安然たるを得」と、然り我基督公教を非難攻撃するには、必ず事故あり、而かも其事故は言ふ可からざる事故なり、非難者自ら身に省みて赧然たるべき事故なり、ラブルエル氏の言は實に我基督公教を非難攻撃する者の心情を穿ちたる砭針なりと謂ふ可し、二百年前既に此言あり、爾來人心は少しも變らざるものと見ゆ。

#### 加特力教以外にも正人君子の輩出するを得る理由

論者曰く、基督教を信奉せざる國民の中にも正人君子は古來多く輩出せり、然らば則ち、我邦亦曷ぞ基督教を遵守するの必要あらんや云々。

(一)我基督公教を信奉せざる國民の中にも正人君子の古來多く輩出したるは、毫も慥むに足らず、蓋し人は無宗教の社會に生息すとすも、是非善惡を識別するの知なきにわらず、而して天賦の良心は人皆之を有す、今其天良の教ゆる所に従つて、我に知れる所の事を實行する者あらん、乃ち是れ又一の正人君子なり、夫れ一方よりは知識と良心とによりて罪惡の嫌ふべく道徳の樂むべきを知悉する者にして、他の一方よりは光榮之を刺激し、名利之を勸起するあらん、誰か其嫌ふべき罪惡を避けて、樂むべき道徳を行はざる者あらん、是れ即ち我基督公教を信奉せざる小天地にも、善徳類似の功業の時に煥發したる所以なり。

(二)然りと雖、全然無宗教を以て主義とする者の中には、誠心一片の正人君子を見ること甚だ稀なり、何となれど「教のなき民は乃ち是れ法のなき民」と云ふが如く、心に皇天上帝を畏敬せざる時は、眞誠に惡を避け善を行ふを好むの理なければなり、彼の利害の觀念によりて、言動を左右するが如きは、未だ以て眞誠の正人君子となすに足らざるなり。

(三)論者或は曰はん、故さら基督公教を假らざるも、他の宗教亦皆以て道徳的人物を作爲するに足ると、然り、僅に足るのみ、充分なりと云ふに至つては、我之を知らず、且其足ると云ふも、余は唯だ或程度に於てのみ之を見る、請ふ左に其理由を述べん、東西各種の宗教如何に不完全なりと雖、又如何に謬戾誤妄の分子を混すと雖、直に之を指して全然邪惡の偽教なりとは謂ふ能はず、仔細に之を檢覈する時は、眞誠なる宗教の原理は、漠々たる偽雲に鎖されつゝも、幾分か其裡に光輝を發しつゝあると認めらる、試に視よ、如何なる宗教と雖、性法の原理、靈性の不滅、神靈の存在等を直接間接に教へざる者はなし、此數者は道徳の標準となるべき偉大の眞理なり、而して既に如何なる宗教も多少此偉大なる眞理を包含するに於ては、其包含する程度に依つて、多少人をして道徳を行はしむるに足るものなり、然りと雖純全たる道徳家を作るに至つては、固より之を渾身眞理を以て成立する宗教に待たざるべからず、而して余は眞理の教は唯一のみ、我基督公教是なりと云ふ事は他に屢々之を證明す、斯く立論し來るときは、他の宗教皆道徳的人物を作爲するに足ると云ふと雖、其足る所以は、

正しく真理の教なる我基督公教に類する點に在るを以て、眞誠道德的人物となるに於ては愈々益々我基督公教の必要を見るに至るなり、然れども人若し或程度に於ける道徳家を以て満足なりとせむ、余亦何をか言はん。

(四)若それ道德的人物を作為する點より觀察して、我基督公教と日本在來の宗教の優劣を知らんと欲せむ、余は之が爲に計る、先づ一方より眞理を探究する一片の精神を以て我基督公教の何物たるやを理論的に討議し、他の一方よりは試に同教を實際の上に応用し見んことを、是れ實に眞理を識認する第一の捷徑なり、斯の如くすることとは、儒佛二教の信徒と我基督公教の信徒は、實際の活證者となりて、一目の下に彼此の眞偽優劣を瞭然たらしめん。

# 照闇の燈

明治三十年二月廿四日印刷  
明治三十年二月廿七日發行

口述者

リギヨール

筆記者

前田長太

發行者

東京市京橋區新榮町六丁目卅五番地  
石川音次郎

發兌元

東京市京橋區木挽町一丁目十四番地  
文海堂

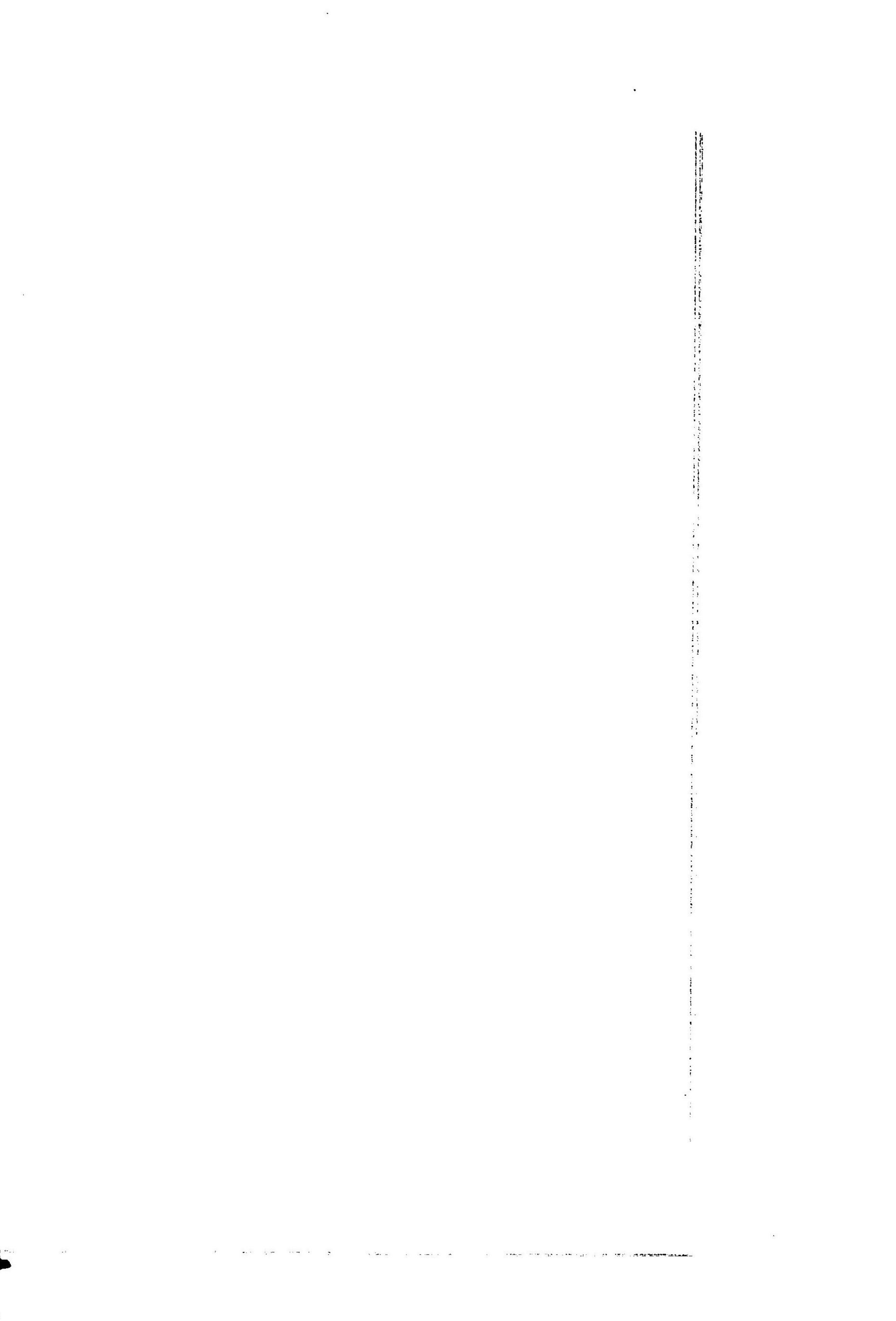
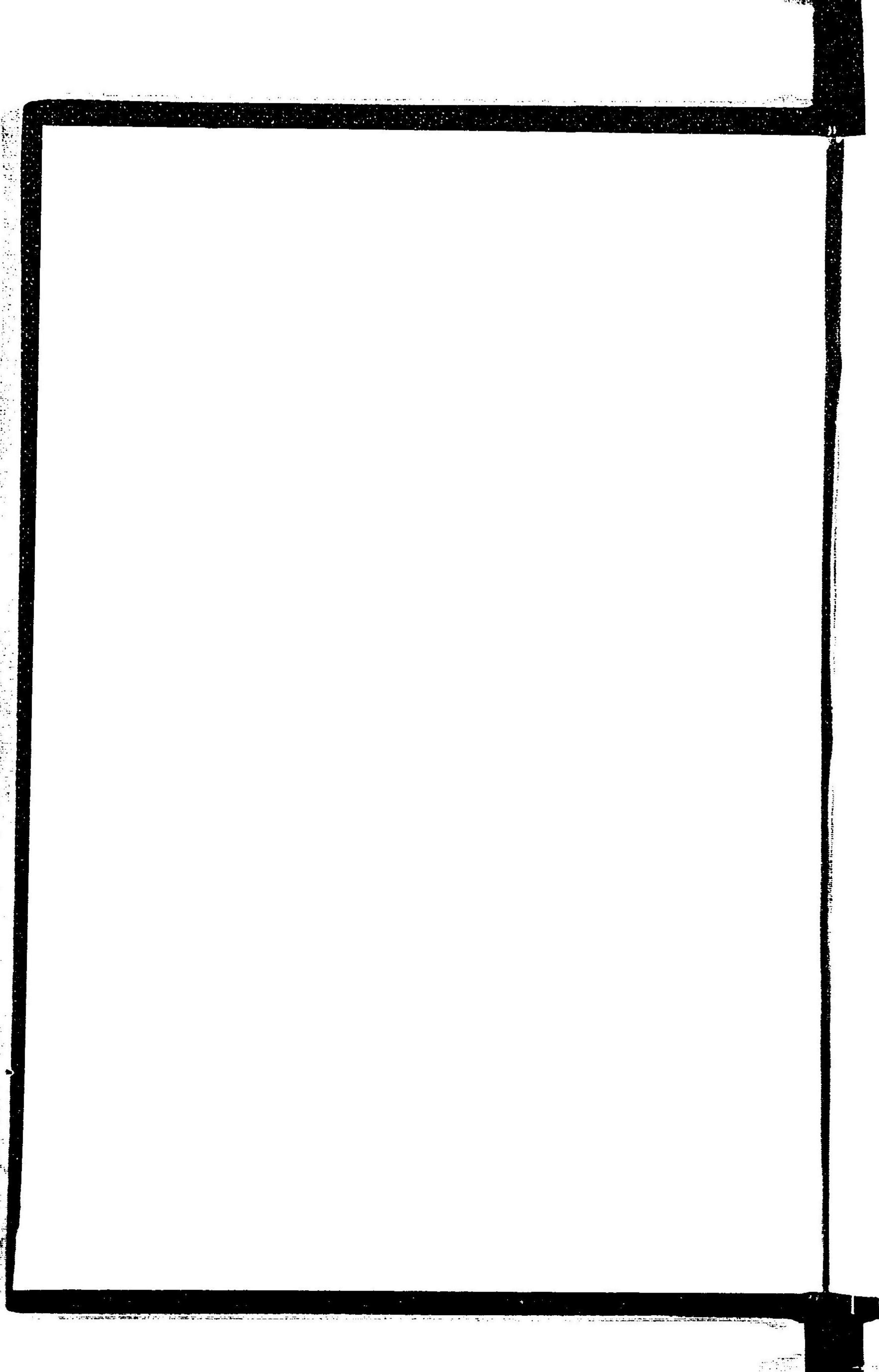
印刷者

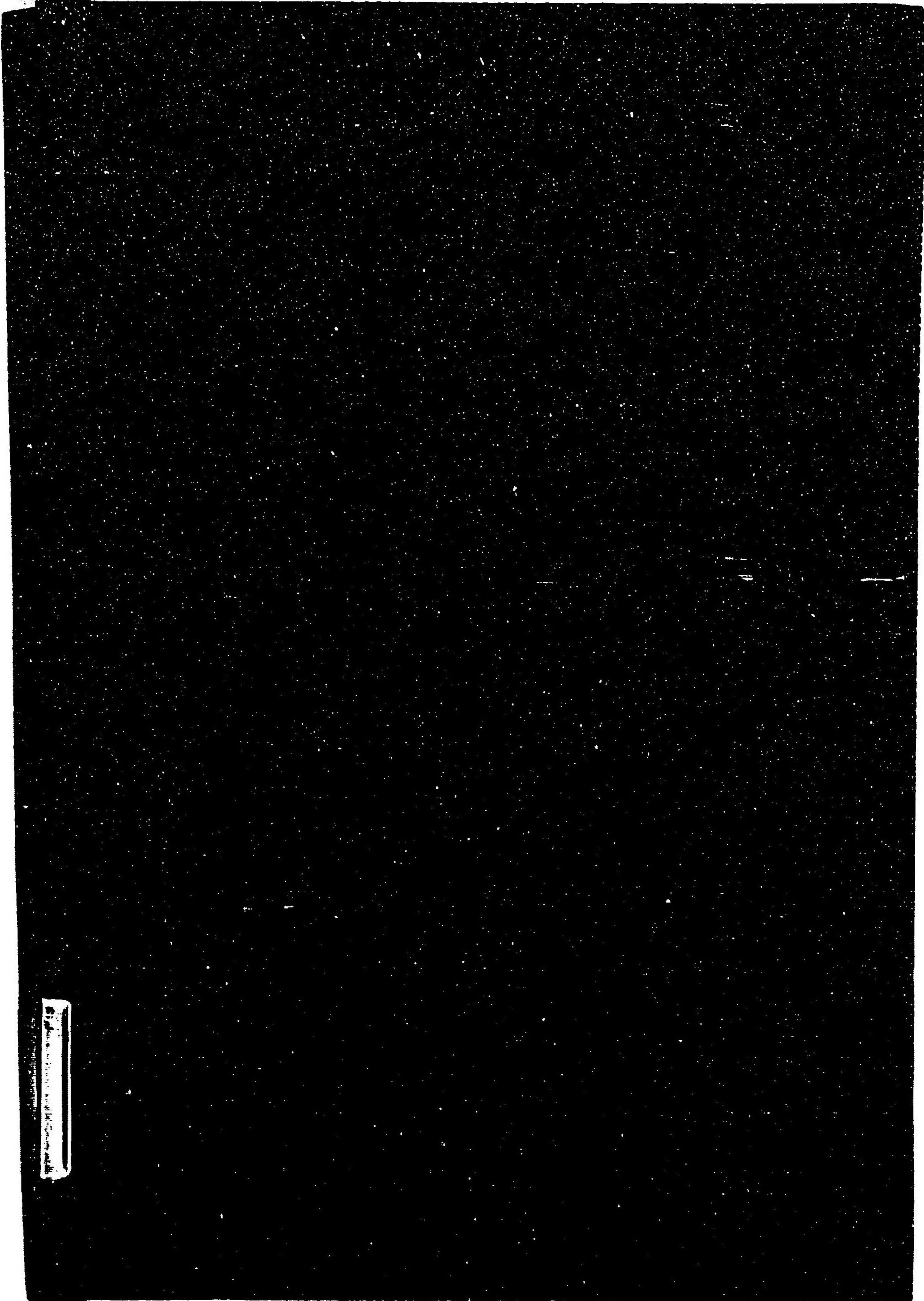
東京市京橋區銀座三丁目十五番地  
河本龜之助

印刷所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地  
國光社印刷部

8-438





19



19  
561

020741-000-2

19-561

照闇の燈

リギョル/述

M30

ABI-0561



